一回

家庭雜誌

十五日
發行

夏期大附錄

八月十五日發行

第百拾九號

奇應丸

定價○瓶入五十錢○大包廿錢○中包十錢○小包五錢

●主治効能●

御小兒衆の虫のやまい○五かんきやうふう○胸いたみ○はら下り○しやくつかへ○船車のよひ○酒の二日よい○はしか○ほうそ○產前產後はよろしからず

◎効驗の顯著にして而かも賣價の低廉なるは普く諸君の知らるゝ所願くは御試用の上倍々御高評を賜らん事を伏して奉願上候

東京市日本橋通一丁目（電話本局四百七十五番）

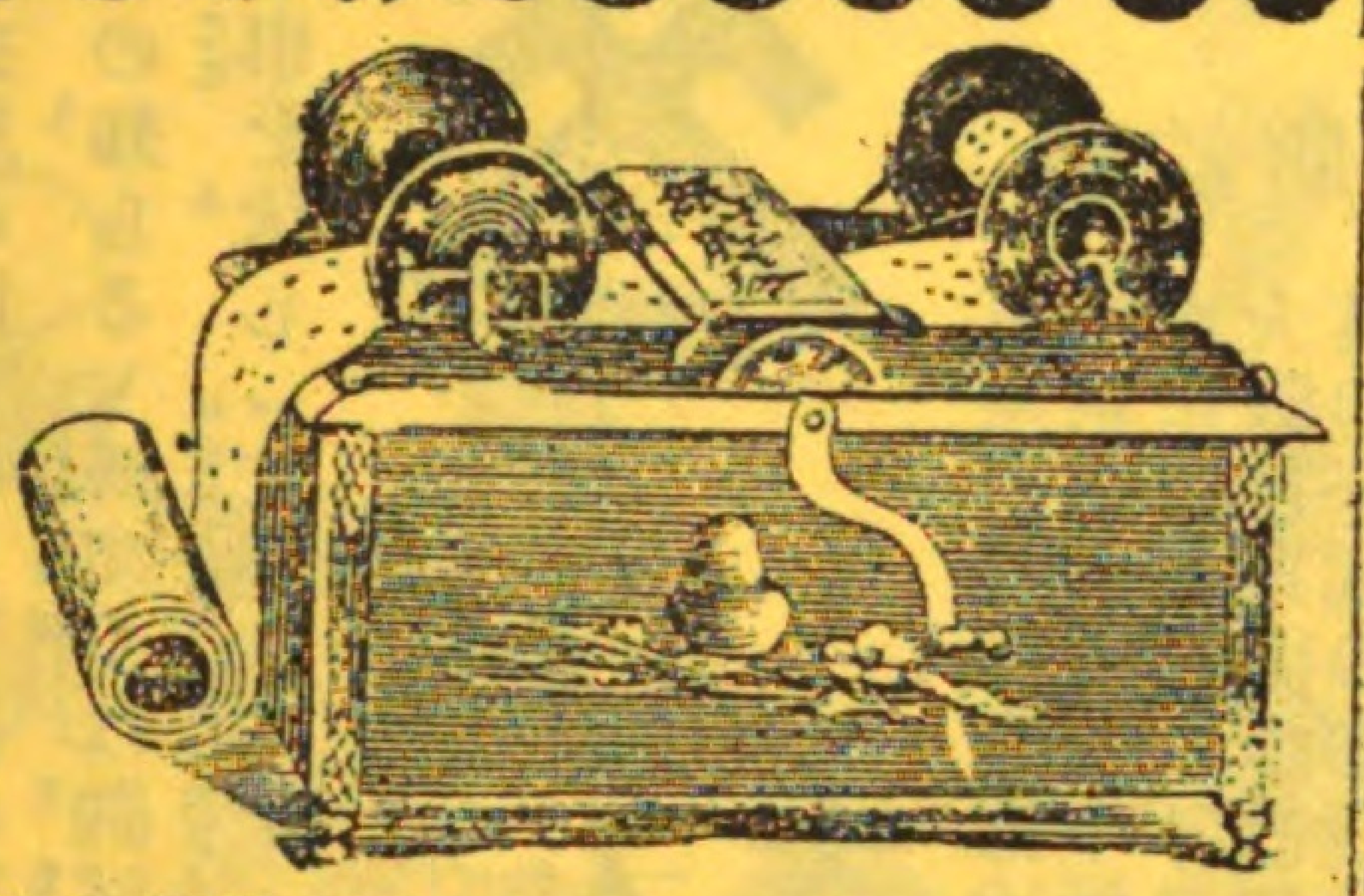
白木屋
大村彥太郎謹製

特約店
東京市神田區鍛冶町　大木合名會社
東京市上槇町中通　安川榮次郎
東京市銀座一丁目　佐々木玄兵衛
大阪市東區道修町　賣藥御賣會社
其他全國の賣藥店に差出し有之候

輸入元東京銀座一丁目つやふきん佐々木玄兵衛

製造元巴里ホートービール街ロージヤガレー會社

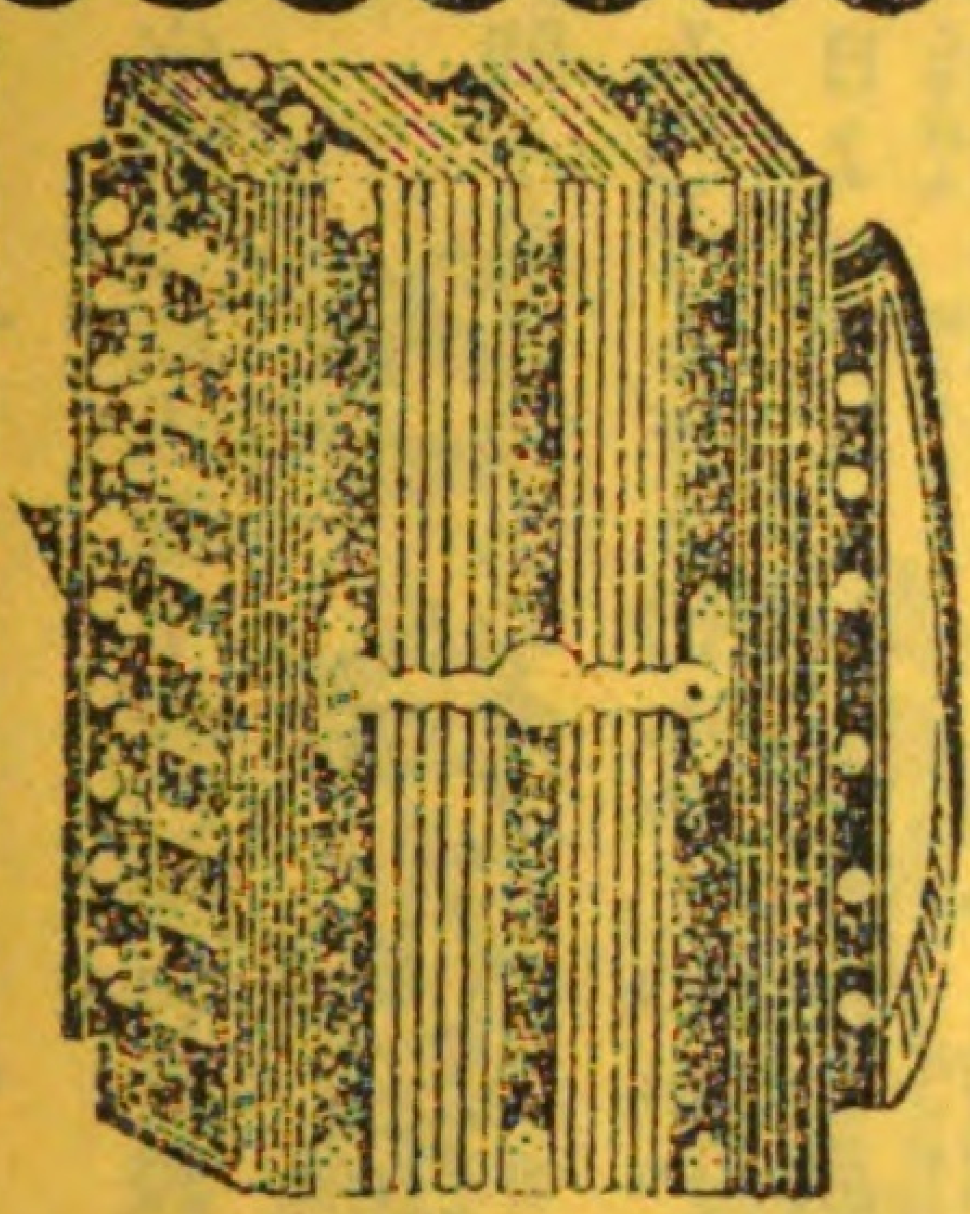




無師獨奏 紙腔琴

本器は誰人にても習はずして長唄端唄清元地唄軍歌唱歌等奏曲の妙を自由ならしむる輕便なる音樂器にて曩に宮内省御用の恩命を博し大博覽會都度受賞の名譽を得ざるとなき名器故へ花晨月夕無聊閑臥の好伴侶と一陸續御用命あらんとを乞ふ

◉大形上製十五圓中製九圓七十五錢並製七圓小形上製五圓中製四圓並製三圓卅錢



舶來 手風琴

手風琴は西洋樂器中最輕便にして學び易く如何なる山間僻地にても獨習し得ると自在なり◉三圓三圓五十錢四圓五圓六圓七圓八圓九圓十圓

學校唱歌

明治音樂會編輯
正價金拾五錢
郵稅金貳錢

樂器本舗 東京銀座三丁目二番地 十字屋

德富猪一郎著（國民叢書第十一冊）

三版 單刀直入錄

定價十二錢
郵稅二錢

◉東京朝日評 蘇峰氏の文其長篇の流麗なると共に短篇の簡潔にして雅趣ある頗る誦するに足る數年前來國民紙上に載せたる短篇百數十種を集めて一小冊子と爲せり間々其極て短文なるに拘はらず却て針小の事を棒大にし低聲にして聽くべきものを故らに大聲虛喝するの觀あるものなきに非ずと雖も亦大に蘊蓄に富みて無限の味ひあるものあり青年子弟の手裏に付與して感化の功大なるもの其れ却て此短篇に在らん

◉東京日々評 蘇峰子得意の短篇凡百四十餘篇を網羅するもの兎に角青年顧客の歡迎を受くるは必定なり

◉大日本評 單刀直入は固に短文の勝場而かも其間に無限の情味を堪へて簡潔、雋永、意深く語切ならしむるに至ては又文の長短を問はざるなり、嘗て文學斷片、靜思餘錄等に由て鼓吹せられたるの青年顧客は須らく此一編をも愛誦すべし

◉經濟雜誌評 蘇峰氏の短文集なり、長きも十四五行、短きは三行四行のものあり、文字淸新愛すべし

森田思軒重譯

ユーゴー小品

定價卅五錢
郵稅金六錢

◉東京日々評 思軒居士の最も好みたるユーゴーの小品文は則ち此小冊子なり其人逝て其文遺る多情の人にあらずと雖も亦誰か之に對して多少の感なからんや

◉時事評 故森田思軒が飜譯して一度國民之友紙上に載せたる隨見錄、探偵ユーベル、クラウド、死刑前の六時間の五篇を收めて一書としたり是れ皆思軒が精力を盡して譯したるもの以て簡勁の文致を味ふべし

◉東京朝日評 千錘萬鍛原作の意義を傳へ其平當穩貼に至らずんば已まずといふの精神を以て飜譯するがゆゑに一種の神氣と品藻を具へたるを以て世に稱せられたる故森田思軒氏の譯文中にも彼が平素尤も敬ふせるユーゴーの小品譯文を蒐めたるもの

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

徳富猪一郎著
國民叢書第十二册（再版）

寸鐵集

定價金十三錢
郵稅金二錢

單刀直入錄、發行二週間餘にして、既に五千册の再版を盡しぬ、江湖の歡迎知る可きも也。本書は其の續篇とも謂ふ可きもの、如何に言短く意長く、文簡に情濃かに興趣坌湧するかを玩味せよ。

◎每日評　無味乾燥の理論も一たび彼の筆端に上れば詩化せられて趣味津々たり『寸鐵集』は政論的斷屑及及び文學的零墨を集錄せし者詩趣卷に溢れて誦するに堪へたり

◎九州日々評　熱罵の文あり冷嘲の章あり着眼清く理想清く文章も亦清く文學的趣味は津々として全編に溢る

◎佐賀自由評　其名の如く寸鐵人を殺す底の矯々たる文もあり或は諷刺的或は警世的或は人事或は社會或は天然の景像を捉へ來りて短篇中に躍如たらしむ

森田思軒遺著
徳富蘇峰
山路愛山 校定

賴山陽及其時代

山陽題字眞蹟及思軒書翰の寫眞銅版刷り挿入

定價金壹圓　郵稅金八錢

◎天地人評　山陽は高潔の人たりき、森田氏も俗塵堆裏に起臥はしたりし者の多少其欽慕せる所の人に感化せられしは爭ふ可らざるが如し、夫の文學的共和國内にて親王家の題字をだも戴くを屑しとせざりし如きは、焉んぞ是れ山陽の自負自信に學びたる者に非ざるを知らんや、（中略）唯思軒の山陽論を載たるのみならず、又蘇峯愛山兩氏の山陽論、朝比奈知泉氏の『山陽の位置（歴史家としての）論』等をも併せ揭げたるを見る、皆是れ嘗て『國民之友』紙上に光彩を放ちし好文字たるなれば、錦上更に花を添ふるの觀なきに非ず、之を要するに文學者としての山陽、詩人としての山陽は、茲に殆んど描き竭せる者と謂ふべけん、生前に無の知己たりし蘇峯が其死後に於て盡くす所斯の如し思も亦至れる哉、思軒瞑すべし

◎帝國文學評　思軒乃至愛山蘇峯の三氏が、山陽其人の眞面目を捕捉せんが爲に、辯難切磋せし結果は、裒然として此の册子を成し、彼れ缺くれば此れ補び、彼れ誇張に失すれば此れ調停を試む、所謂三人寄れば文珠の智惠なるもの、本書の到達せる範圍にありては完備といふべし。心ある者は一本を求めて座右に備へんことを慫慂して已まんのみ

◎日本評　故森田思軒が一著述として後世に遺すに足るべき賴山陽は今や蘇峯愛山が校定を經て茲に一卷を爲すに至れり民友社が十二文豪中一異彩を放つものあらば先づ指を此書に屈せんか一卷六百頁に垂んとし卷中往々蘇峯愛山等の批評を加へ且つ愛山和泉の意見を挿みたり全體に於ても考證博く立論亦確實を失せず畧々賴久太郎が人物性行を判定するに足るもの有り燈下豆を嚙むで古人を評するの人皆須らく一本を座右に備へて可なり

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

徳川二名臣

松平伊豆と阿部豊後

印刷中

炎威將に去て新涼來らんとす所謂燈火可親の好季も既でに近けるに際して徳川二名臣新に出版せられたり考證の正確にして然も周到なる才筆の縱横にして然も流暢たる最も多趣多味なる徳川史上の花を飾るに更に錦を以てするの觀ありといふ可し題して二名臣といふ一は篤實を以て稱られし阿部豊後守忠秋にして一は智慧伊豆の名に依て世に知られたる松平伊豆守信綱なり讀者は兩箇の性格施設を此書に依て學ぶと共に島原の亂由比正雪の變振袖火事其他紀伊大納言の自刄堀田上野介の亂心浪士別木等の騷動等に至る迄當時に於ける變化と興味とに富める舞臺は其樂屋迄詳細に躍如として描出せられ更に遺憾無きを見るべし

木村重成

一名大阪落城史

新刊發賣
定價拾五錢
郵税四錢

大阪落城は一種の悲劇史なり、我國のクレオパトラたる淀君その化粧男たる大野治長等は、家康の忠告的命令により巨大なる神社佛閣を造營し以て城中唯一の財源たる太閤傳來の金馬を消費し、反間的使嗾に乘じて誠忠なる片桐且元一派を驅逐し及び姑息の媾和を結んで城中の要害を撤去し、以て無殘にも幾多の名將勇士をして空しく泉下の鬼と化せしめたり、——忠魂義膽雪の如く花の如き木村長門守重成彼れ亦甘んじてその戰死を期せし可憐の若武者たりしなり

大阪落城は老雄の家康最後にその獨特の技を演じたる所謂御名殘狂言なりき、されど從來の史家その幕府を憚つて曲筆し或は事實を庇護したるもの多し、本書は深く茲に注意し正確の事實に基き忌憚なくその眞相を論述したるものなり

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

明治三十一年八月十五日發行

家庭雜誌第百拾九號

目錄



小川一眞製

夏曉

家庭雜誌第百十九號

（明治三十一年八月十五日發兌）

社説

人の一生は家庭に在り

人の一生は家庭にありとは、今さらだちていはずもあれど、敎育、境遇の良否が人の一生の榮枯得失を支配することを思へば、吾人は常にこの言葉の意義を深く强く感ずるなり、感じて而して家庭を視ることなほ國家を視るが如く、家庭の平和と否とはなほ國家の平和と否とに於けると同じく喜憂を感ずるなり。

國を治ることは必ず先づその家を齊ふ、その家敎ふべからずして能く人を敎ふるものはこれ無し、ゆゑに君子は家を出でずして敎を國に成す、孝は君に事ふる所以なり、悌は長に事ふる所以なり、慈は衆を使ふ所以なりとは、治國齊家の道を說きたるものなるが、これと等しく家庭に在て仁ならば、社會に立て仁なるべく、義ならば社會に立ちて義なるべく、勇ならば社會に立ちても勇なるべし、家庭は人の一生の運命を司る苗床なり、良き果を結ぶも、花のみにて實らぬものとなるも、皆こゝにて定めらる、後の如何なる學問、智識、經驗も大概はこを發達し進步し擴張ぐるだけの補助ならむのみ、その根本に於て人の一生は家庭に成る。

ワシントンが父の愛樹を伐つてかくさずその過を悔いたる家庭の公明無私は、合衆國十三州の大統領たる英雄の一生を解すべく、ショッペン、ホウエルの厭世哲學は、その家庭の不幸なる遭遇よりして組織されしことを見るべく、武士の家庭に育ちたる人は、政治家となつて如何に世の變遷に依り階級制度を打ちこわすなど唱へてもやはりつまりは階級主義の政治をなすやうになり、家庭に繼子あつかひされたる人は、如何に學問の力敎育の力を經て、道理を知るやうになりても、

世に立ちて兎角に社會主義とか財産平均主義とか、社會に不平がちなる意見を持するもの多く、温かき家庭、平和なる家庭に育ちたるものは、如何に境遇の波瀾を受けても何處かに一點の餘裕あつて温然として情に厚きところあるべし。

家庭の主婦たらむ人は、一國の、大臣となつて政を料理する程の大切なる考にてあらまほしきと、冗くは言はざるべし、孟母三遷の敎といふとも、氏より育ちといふとも、日常箸の上下につきまとふ切實なる憲法なり敎訓なり、赤子を保するが如く之を求むれば、中らずと雖も遠からずとかや強いて理屈や學問にて敎訓の道を尋ね得むとするに及ばず、手近き處に、その道の端を識つてこれを推し廣めなば、敎育も學問も皆活きて世に用あらむ、小なりとて惡をなすなかれ、小なりとて善をなさゞるなかれといふとあり惡しきも善きも小なるがために輕重せられぬものと知るべし。

夏の家庭と女學生

學校の敎育は型なり、社會に處するは眞劍なり、學問上の知識を社會に應用せざれば、劍術の型を知つて眞劍を知らざるが如し、女學生が夏期休課中その家庭に在るは、まことにその型を眞劍に試めす好機會なるべし、裁縫をなす宜しからむ、料理を試むる宜しからむ、音樂を試みて家族を慰むる宜しからむ、孝を施し悌を施し慈を施し、親族朋友を訪うて交際の一端を知るなどさらに宜しからむ、品性の修養、知識の經驗などすべてこの休課中に得むと必要なり型と眞劍とはうち見には違ふものありながらその實、眞劍より出でたる型なれば、よく〳〵合點して、敎育の型を實驗に成功せしめむと諸子の心がけ一なるべし。

都と田舍との衝突

地方より東京に移住せる一家が、東京にある親しき人と交はるに及び、その家族と家族との交際上、思想或

情の衝突より、あらぬ誤解を來すとは吾人の屢々見る所なり。

東京人は交際に長ず、敏捷なり、田舍の人は迂濶にして交際に拙し、この迂濶と敏捷とが相衝突するとあるなり。

東京人は注意深し、田舍人は注意至らざるとあり、東京人は義理を重んず、田舍の人は情誼を重んず、東京人は面目を重んず、田舍の人は精神を重んず、東京人は過失を容さず、田舍の人は疎忽を容る、東京人は物をうくるに必ず酬はざるとなきと共に物を贈るに必ず酬はるべきものなるを信ず、田舍の人は物を贈る必ずしも報をおもはず、物を受くる必ずしも義理を衒はず。

東京人は文に、田舍の人は質なり、この間の氣風相了解せられざる間に、家庭と家庭との衝突あり訕話あり、吾人は交際上に東京人の注意周到なるを見て、田舍人の家庭主婦が之を學ばむとを望み、田舍人の情誼上に眞實なるを見て、東京人の家庭主婦が之を解せむとを願ふ。

舊習慣を保存すべし

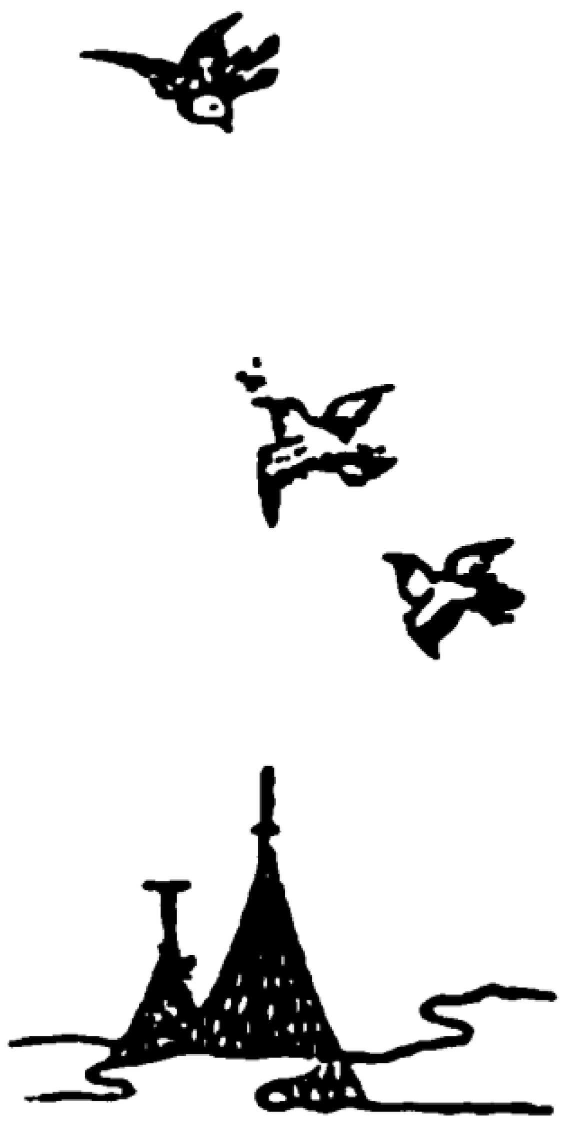
家庭の主婦となれる新しき教育ある女性は、家風とか儀式とか交際とかいへる、その家につきその町につきその鄕につきたる舊習舊例のためにうるさきまで煩はさるゝとあるべし。これはあながちに排斥すべきものにはあらず、凡そ習慣儀式の中には厭ふべき弊風もあれど、その形を存して精神を注入し、新しく生きたるものとすべし。例せば田舍に於ける社日の如き村嬢野娘の交際の機關なるを、要なきわざなりとて廢せむか、これに換ふべき親戚知友交通の機は失はれむ、若し社日に伴ふ弊風あらば新教育ある女性の家庭の主婦となりしものは、宜しくその弊を捨てゝその利をとりて舊慣舊式に從ふべきのみ、これに依てまた新理想をその親戚故舊家庭間に施すの考を要すべし、舊慣の惡しき

は、精神の空しくなりたるためなれば、精神を新に注入してその形式をば保存すると必要なり。

夏曉　(口繪參照)

人の夢なほ醒めず、天の旭未だ昇らず、曉嵐清く山を刷きて、森に朝の韻あり。纎風しのびやかに水を渡りて、湖に朝の光あり。青蓮滿目おきあまりたる夜の露か、消え殘りたる天の星か、きらめくと見ゆる間に、旦の神の氣息の如き聲ありて、遍く開ける小西湖上の白蓮花、清爽の氣骨に浸むばかりなるは、湖畔の夏曉。

蓮ほの〲戸いまだ明けず湖心亭　子規





史談

百川一算（珠算の名人傳）

粲龍生

近時數理の學大に進歩し、算術、代數、幾何、三角術、微分、積分等、凡て學業に從事するもの、一通り學ばでかなわぬものとはなれり、左れど貴となく賤となく、一班に通じて日常欠くべからざるものは、彼の四則なるもの即ち加減乘除にぞある、之をなすに迅速にして簡便なるものを、日本傳來の珠算なりとす、故に外國の會社にても、之を用ふる處も尠なからずと聞く、今は珠算と謂へば、加減乘除にのみ用らるゝと思はるゝ方も少なからねど、昔はそれそれ專門家ありて、山岳の高低、土地の廣狹、天文暦數、其他ありとあらゆるもの、實に數理の應用廣かりしなり、偖其稍々込み入りたる術となれば、一家相傳など唱へ、容易に他に傳へず、思ひ思ひに一派を立しものなり。茲に加減乘除を爲に、簡便迅速、且に習ひ得易きものあり、そは百川流一名龜井算と唱へ、越後、佐渡の間に播布し、日常の勘定專ら此流をのみ用ふ、余が住める相川の里にては、小兒五六歳に達すれば、家庭に於ける一科業として、必ず習ふべきは此珠算にぞありける。左れば鍬鋤とる農夫、藻鹽焚く海女が兒に至るまで、大方習ぬものはなき樣なり。余が幼かりし時、叔父なる人の最と數學を好まれけるが、夏の日のつれつれ、冬の夜の長き折々余を書室に招き、余が爲に、一皿の菓子と一瓶の番茶とを調へ、さて語り出で賜ひし、くさぐさ、今はうろ覺えに覺え居るもの、たどりたどりて、茲に書きつけぬ。今は昔し、元文の頃(百六十餘年前)花の都の大江戸に、甲斐宗兵衛と呼べる數學家あり、此人數理の術には秀でたりしも性質傲慢にして、人を眼下に見るの癖あり、門弟夥多有しけるが、常に語て曰く、

吾れ數學に身を委ぬること數十年、未だ吾に越ゆるものを見ず、吾れ是より諸國を遍歷し、吾が技量を顯はすべしと、野に山に人のうかるゝと云ふ彌生の頃、西國、さして出立けり。茲に又た浪華の都に、藤井玄順と謂ふ數學家あり、門弟多くを有し、其名關西に轟けり、宗兵衛傳聞き、何程の事かあらんとて、或日玄順方を訪れ、其技を鬪さんと乞ふ、其言如何にも無禮なりけれど、玄順は温和なる質にて、人と爭ふを好まざりければ、禮を厚し、語を低し、ひたすら其鬪技を避けしかば宗兵衛心益々驕り、思へらく、玄順余を恐るゝこと斯の如し、と飽まで傲慢に振舞ひ、果ては、喋々と點竄の術を說き傍ら人なきが如し、並居る門弟何れも拳を握り腕を扼し師の寛胸に過ぐるを嘆ずるあり、或は宗兵衛の無禮を憤るありて、彼が演說を聽くもの、一人もあらざりしが茲に玄順の門下にて夙に俊秀の聞えある百川一算と云ふものあり、進出て謂へる樣、先生の御高說如何にも靈妙幽微、與に敬服の外なし、某藤井氏の門に入りてより數年、日夜數學の研鑽に身を委ぬるも、今に達し能はざる者は寄せ算に候と、其言未だ終らざるに、宗兵衛からからと笑ひ、汝は藤井氏の高弟と聞しが、寄算を解せぬとは偖も小兒にも劣りし事よと冷笑す、一算は猶も語を低し、否々某とても寄せ算位は解せぬにあらず、唯だ達し難きのみ、恐らくは先生とても然るべしと云へば、宗兵衛憫然として、寄算は胸算にて足るもの、如何なる難問にても答ふべしと云ふ、一算微笑みて幸ひ某一冊の書を有せり、是にて讀上ぐべければ、總計をなし給へとて、無理に算器を取しめ、音聲朗々、今は京、兆の大數かと思ば、忽にして垓、稀、穰、溝の小數に至る、錯雜なるもの數十條、滔々懸河の疾辨を以て讀去り讀來れば、宗兵衛心亂れ、眼眩み、指屈し、遂に算器を投て其及び難きを謝す、一算容を改め、聲を勵して曰く、數學

は實用に適せざれば何の効あらん、汝猥に喋々點竄の術を說く、是れ徒だ机上の空論のみ、吾師之を知らざるに非ず、猥りに論爭を好まざればこそ默したれ、汝猶ほ大言して快となす、汝の如き無禮漢は吾輩の共に語るを耻る處、疾く去れ、疾く去るべしと罵りければ、並居る門弟一度に哄と笑ひけり、さすが傲慢鐵面の宗兵衛も、冷汗背を濕し、一言の答もなし得ず、逃ぐるが如く旅寓に歸り、其夜何くともなく出奔しけり、衆皆一算の頓才を嘆賞せり、是より一算の學藝日に進歩し、盡く師の秘術を受け、玄順の後を繼ぎ、名聲日に高く、門弟常に堂に滿てりと云ふ。

空にはなびける雲もなく、梢にはそよげる風もなき夏の半ば、一算は暑さに堪え兼ね、夕暮より知己の許を訪れ、夜更けて皈途に就きぬ、難波橋に來かゝりし時は、橋上納涼の客も散り、兩岸の火も消え、月の光り、水にも空にも滿て、涼味滴る計りなり、唯看れば、橋の中央の欄干に倚りて水面を覗き居る者あり、此夜更に橋上に佇む者は何者ぞと、折しも月の暈に隠れたるを幸ひ、忍足に近き見れば、何か低聲に呟きつゝ、下駄脱ぎすつる樣なるにさては投身と、走り寄りて抱き止め、生は難く死は易し、先づ先づ待れよと欄干より引き放し、雲間を漏るゝ月影に、能く能く見れば、年の頃は三十前後、身なり人品、賤しからぬ男なり、是には何か仔細ぞあるべし、兎も角も某が家に來られよと、辭む男を引連れ吾家へ歸り改めて其仔細を問へば、其男厚く禮を述べ、偖言へる樣、某事は堂島に住む井筒屋庄七とて、可なりの財產ありし身なれど、良からぬ人の勸めにより、一時の利欲に迷ひ、先月半ば、米穀數十萬俵を買しに、米價次第に下落し商法の資本さへも失ひ、祖先傳來の家產今や他手に渡らんとす、生きて耻を見むより死するに若かずと覺悟を決め、斯くの始末と物語り又も涙に暮にけり、一算は同情の

涙を催し懇々慰め諭し、其夜は吾家に止め置き、偖て翌朝庄七を招きて言る樣、某今より暫時姿を隱すべし、御身は家に歸り、某の音信る丶迄は、一粒の米たりとも、賣るべからずと言含め、旅裝を整へ、門弟へは仔細ありて近國へ旅行すべき旨、言ひ傳へ、飄然として何くともなく立去りけり。斯くて四五日を過ぎても何の音信なし、庄七は兎や角と按じ暮せしが、凡そ十日許りも經たらんと思ふ頃、見馴れぬ乞丐數多市街を徘徊し、口々に言へる樣、吾等は仙臺地方の農民なるが、先月下旬より霜降の爲め口糊のたつきを失ひ西國へ巡禮に出掛けたりと言ひ、或は又た他の一群は、越後地方の土民なるが、洪水の爲め家屋田畑を失ひ、斯る樣なりと言ひ、薦を被ぎ、莚を着、店頭によりて憐を乞ふ、其聲如何にも悲しげなり、之より東北地方饑饉なりとの風評四隣に傳播し、米價忽ち騰貴す。或日一算突然歸り來り、彼の貯へある米を出して、盡く販賣し數萬圓の益を得たり、庄七は夢かと計り喜び、利益の半を一算に送りて其厚意を謝せしも、一算は吾れ利欲の爲め汝を救ひたるに非ずとて、却て受けざりけり、間もなく、多くの乞食は、何時しか影なく去りゆきぬ。是れ全く一算の謀計にして近國に、さまよう藝人の類を雇ひ乞食の姿になし、都に入り込せたるなり、此事早くも官の探知する處となり商賈を誑惑し人心を騷がしたる罪輕きに非ずとて、即時に捕縛せられ江戶表へ護送せられたり、庄七始め門弟等は大に驚き、百方奔走盡力したれども、其甲斐なく、遂に一算は死刑の宣告を受けたりしが時の閣老青山大膳亮、一算の才を惜み且つ其義氣を感じ、密に命じて他の死刑に當る罪人に蒙らすに一算の名を以てし、一算をば江戶無宿と唱へ、佐渡國へ流罪せられたり。

斯くて一算は寛延三年五月、越後國新潟港へと着にけり、佐渡は四十九里波の上との俚歌の如く、其頃は瀛

船の便なく、殊更梅雨の候とて、荒浪岸を噛み濺るに由なく無聊に過すこと殆んど十日に及べり、或日の事なり一算が爲め宿直せる、龜井津平と云ふ新潟生れの者あり、數學を好み、籠前にて頻りに算球を彈き居りしに、籠中の一算、無聊の折なれば、語をかけ、貴殿は數學を好むか、某の一問を解き給へとて、問題を與へければ、津平沈思默考すること數時、遂に解答を得ず、一算に敎を乞ふ、一算その解を與へて頗る詳明なり、津平感服、酒肴を供して其憂を慰め、經歷を問ふに、一算質を語る、津平心服して師弟の約を結び、斯くて佐渡に送られし時津平も亦隨行し、居る事、半年にして新潟へ歸り、門を開きて、子弟を敎ふ、其法甚だ簡便なるが故、門前常に人を絶たず津平は其師を一算なりと稱するを得ず、本意なくも己が姓を取りて之を龜井流と名けたり、一算は佐渡にありて鑛山人夫となり苦役に從事しながらも、日夜研究に怠りなく、遂に佐渡全國に百川流の名を傳播せり、井筒屋庄七に一算の流罪を聞き、密に人を遣し、金品を送り、一算をして、常に不自由なからしめたりとぞ。

嗚呼、一算義によりて身を顧みず、孤島に居りて學事を勵み、あはれ鑛穴に枯骨と化す。左れど、左れど、百川の流れは絶えず、榮え榮えて、永く里人の腦裡に記憶せらるゝこそ芽出度けれ。　（をはり）

本篇は佐渡紫龍生の投寄にかゝる家庭の談柄にもさて此に收む　記者附記

談叢

大關おあさ（中）

天聲

うら〳〵霞む春の景色も父思ふ心には眼にもとまらず、大關おあさは十四の女、常衣に帶かたく裳裾短かく端折り、白の脚袢に白の足袋、天鵞絨の緒すげたる

木履はきて片手には日傘を杖にもして生れてから歩きしとなき路程二三里は夢の如く來りしが、往き來うものわれのみならず、旅刀腰にして羽織佩服襞の油にてりつく男の、後より行李雨掛にしてつゝく奴に背ながら語り來る、黒羽二重編笠眉深に兩刀の欛頭のみ見せたる武士も來る、馬追ふ男の鼻うた高く荷鞍に添うて來るもあり、山駕籠に藥籠膝もとに置き、東風にとろ〳〵と夢をのせ、息杖急がせて來るもあり、背より高く笈負うて叩鐘撞木に鳴らし、無常はこれぞと哀れの唱名、口にして來るもあり、紺標の袢纏三尺帶に曲尺さして頸に小包を縊せし男、路傍の社など眼を注けて來るもあり。

馴れぬ脚は木履にたまらず、窪みに蹉き石に躓れて、鼻緒やう〳〵ゆるく、はては切れたる塗端に膝頭すりむきて痛さに、鼻緒のたてかたも知るや知らずや、木履投げ出し足袋はだしに五六町歩みしが、松の梢兩側に並樹ありて風そよ〳〵通ひ、芝生清らなる處覺えず休みたくなつて、腰おろして見まわせば、彼方に杏の花咲き亂れ、一片二片雪と落る下に、茅屋の廂少し見え、草鞋幾個も吊したるが眼にとまる。昨日巡禮の穿きしは彼樣な家にて賣るものかと心づき、やがて辿りつきて見れば、老媼一人皿小鉢洗ひ居たり、言葉かくるも何となく嫌に、軒には入りながら思案するを、婆は訝かしき眸采して此方を見るに思ひ切て、知らぬ人に言ふと丁寧にと思へば、おばあさん此草鞋は幾許しまするど、細やかに問へば、婆は答よりまづおあさの裝に額の皺を重ねしが、それは一足五十文志まする、おまへさんのに穿けまするものかと、笑ふ唇頭に斑々の歯見せける。さもあらむ荒繩の紐太く大きくてとても女子の穿くべきならず、同じやうにかけし竹皮草履これはと問へば八十文、それではこれをと錢とらせ、汚れし泥足袋拂ひもやらず、穿き了つてゆきかけしが、た

ち戻つて、もしあの水戸からこゝまで何里ありますると問へば、烟草ふく息長く、五里ありまするといふに、わが身は十里も十五里も歩きし心地なるを、さりとは歩けぬものと婆のいぶかきし顔を後にして、一心に父の事と天神樣祈りつゝ往きゆけば、長き春日も暮近く天の色も淡れ紫の雲際になびき遠山の外にまた山の姿寢たるが如く、和かき風頬を撫でゝ、吹く末は路もせの桃の花、落らす風情も閑なり、野邊の菜花尋ねわぐみてや、迷ひ來る蝶の影、後になりさきになる。狐のやうな、犬の、何處かの背戸に、夕陽の影法師を吠えて垣に噪げる雀群のばつと飛びたつも景色なり、過ぎゆく街々村々、家々の炊烟のぼり、一ぜんめしの表障子も、今は取り入れらる。總てこは朧ろに下す霞の幕に淡昏ふなりぬ。

或村端の家に、邸の煤掃ひの時より外、口あてざりし甘酒を啜み、捻飴、豆の棒、稲荷鮨二つに足らぬを今日の午餐に夕餐を一度に凌げば、嚢中は唯青錢二個餘すばかり。

日はまたく暮れ、家に燈見えるやうなりしが、脚下いつか明く、わが身に先だつてゆく影法師に、顧けば、月は東の天高く、婥しき顔を霞の薄絹に隔てゝ、朧の光、人の行くを送る。

江戸の都に通ふ路、晝こそ喧しくも往來はあれ、此頃世の亂れに追剝盜人の噂絶えず、此邊財布は持つて通れぬ物騒家々は戸締早く、殊には村、――松並樹――寂しく、春ながら麥生の上面通ひ來る野風、身に浸みて寒く、風に送られそよ〳〵と忍びやかに鼻に入るえならぬ香、霞にこもりて重げに響く鐘の音、夜は何處かに哀の種ひそみて、寂しさは一層。

空虛駕籠擔げて對面より來る二人の男、話しながら來しに、胸悸きて覺悟しつゝ近づきしが、我には事なく行き過ぎたる、語るを聞けば此前路に松列樹、昨宵も

旅客一人剝衣れて裸躰のまゝ逃げしとの事、女心に氣味わるくなりしが、父の平常の敎、護るは此時、武士の娘ぞときつと從容き、行くと二三町ならで並樹の路なり、兩側土堤にて草花生ひ茂り路をのぞく樣なる松の葉越の月も凄みあり。剝れしは此邊か彼邊かと思へば、竦として風寒きに、帶にかたくつけたる懷劍に手をかけ、如何なるもの出るともと、心には天神樣祈りながら、有るほどの勇氣をはつて行くに、仔細なかりしは神の冥助か。村に出でゝ息吐きあへず、四隣覗へば、宵より程たちぬれば、村に一軒の起き居るさまなく、紡績の車の音さながら夜の深くるを促して幽に聞えぬ。

何處に宿らむと定めしならず、わが眼江戸より外なく、父より他なければ、唯々歩むばかりなりしを、今は一日の疲勞やう〱兆して、足は鐵より重く脚熱したるを、なほも堪え忍びて村の端に一點の燈火を認め、小森の中に荒れたる堂宇あるなり。今日は祭りにてもありけむ、油皿に燈柱點し、堂の中六疊敷ばかり板張に、童の遊びし名殘か、草花散せし蓆一枚、格子戸より燈光に壁の方見やれば、不動明王火焰背に負ひ劍手に持ち、雙眼瞠きたるが、嚴しく坐りたまふ、兎角は躊躇ひしが、どうでも今宵わが宿はこれと定めて容易く開ける格子戸を中に入りて堅く閉め、不動の前に跪きて、口の中に父の安全を祈誓し、幾度か拜を重ねて蓆に坐り、われとわれをば按摩して休みしが、草履の裏と裏とあわせ、草花かき寄せて球となしたるをのせ、風呂敷包に前褙を重ねて包み、假寐にも頽さぬ枕のたしなみ、蓆を衾に横になりぬ。

杉の梢に鳩のさゝやき月かげふかく、何の風かさやさやと音づれて、夢むすばれず。燈火何の心ぞや、燈柱の丁子一つ咲きて吉事をしめせしが、程なく床に落つるとひとしく油は盡きて火は消えぬ。其の暗黒なるに

戸外の月も落ちたれば、眼さえて映るは父のおもかげ、よくこそ來たれと聲する方に飛んでゆきたく思ふうち、終日の疲勞一時に生じ、蓆の床に草履の枕、夢の國にとわけ入りぬ。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

渇きては流れに咽喉濡したれど、飢えては嚢中にものなければ、靑錢二個に繋ぎし命細く、紊の鬢埃に塗れて穢く、顏憔悴れて黒眼の光殊に鋭く、喘ぐばかりの路はかどらず、三月は十二日の朝まだき、甍ならびたてる巷にたどりつきぬ。武士町人の影もなほ見えざれど、これこそはと思ふまゝに、逢ふ人もやと行くほどに、一人の年たけし婦に逢ひぬ。もし／＼と腰低く、耻かしやかしきわが姿の見すぼらしきを厭ふ術なく、此處は江戸でござりますかと問けば、あいさうだよ、此度は江戸の端上野廣小路との言に嬉しく、この邊に天神樣は御座りませぬか。それはこゝより遠くはない湯島といふところ、もう少し行つて左へまがり、また右へまがり、聞いてゆけば分るよと敎へられて、やう／＼に湯島天神、膝がしらに力をこめてのぼる石段の脚もと危うく、神前にぬかづきてわが身無事の悦、父和七郎に逢はれますやうと一心不亂に祈り了へ、人語に起ち上れば、町人らしきもの三四人、朝參りにや、語りあふ言葉の數。三日の働は目覺しい事だとよ、八人とも細川樣へおあづけになつたとか、水戸つぽうの浪人はえらいぢやないかと、聞くにさてはと嬉しさと憂さ。ぶしつけながらおきゝ申したうござります、唯今の御話しの浪人の姓名は何と申すものでござりますか、と問へば、つい聞いたが忘れつちまつた、八人たしかに細川さまへおあづけになつたのだから、知りたくば、細川のお屋敷にいて聞いたがよし。おりかへして、細川樣のお屋敷は何處でござりましよう。うん、

此坂を下り、お成道といふ廣い通りへ出て外神田から筋違御門、神田橋、大名小路と聞き〳〵行きなさいと、懇ろの答へに、恭なしと禮して起ちしが、九日に食ひ、十日に味ひしばかりの腹、身躰は疲れて足ひよろ〳〵、蹣跚つくを倒れまじと一生懸命に蹈しめて、此處大名小路と聞きたる路を辿りつき、嚴しき通用門に倒れたる身をそのまゝに跪いて、息つきあへずお願ひが御座ります。

赤穗義士以來例なきと、一國の大老を途に斬りし水戸浪士、幕府の命に預りし細川家、門の出入嚴しく、番人増して衛らせけるが、見るに憔れはてたる田舍娘の御願がござりますといひても耳に入れず、通れ〳〵と睨みつけたるを、此方は、俯伏してお願が御座りますと細き聲に哀れは見ゆる、番人苛ちて、通れ〳〵通らぬと打つぞと威赫すに少しも動かず、もてあませし樣子に門の中に居し同役こは何か理のありさうなと出で來て見れば、言葉は水戸なまり、それと心つきて、拙者に任せられよと同僚に合點させ、そこの娘此方へ來よと番所の裏手に導き、さて何の願あつて此邸には來しぞとの問ひに、はいありがたう御座ります、去る三日御大老樣を害めました浪人八人、此お屋敷にお預けの由、その名姓御知らせ被下ますやうお願ひ申上げますると、聞きてさては浪士の身のものと不便を催し、それは姓名聞かせてもやらふが、其方何で名が聞きたいか、理由を申せとの詰問、おあさうなづきて、私こと譯あつて御尋ね申まする、名のうちに思ひ當りました事あらば、其上始終は申上まする。男少し威儀つくりて、凡て人に物尋ぬるに、おのれのとを先づいはで問ひたゞすと法に於てないと、それでは敎へてもやれまいぞ、といはれて、おあさ涙ぼろ〳〵膝に落つるを手にて拭ひ、何卒お慈悲に敎へなされてと言ふにも勞れは總身にわたり呼吸切れがちなを男は察し、傍への辨

當今日の午の飯に湯をかけ、粥にして、空腹かるべしこれなりと食べて凌ぐがよしと信ある欵待も願のとほらぬうちは、飢えながら食も咽喉にとほらぬ一念のさま動かし難く見てとつて、頷く番人。兎も角も浪士の姓名聞きたしなど、變あつては事ならんよい加減になされてはとの同僚の注意をうち消し、何の心配さるゝに及ばず、十三四の小娘一人、何が出來やう、思案あれば任せられよ、お咎あらば罪は拙者受くべしとて、さて姓名きかせたけれど一存にはゆかぬまづ上役に問ふてと詰所に至り、事を通ずれば上役も憫然に思へど勝手にはなり難く、かくて家老を經て殿にも聞え、おあさ多時番所に休ひし程に上役よりその娘同道せよとの命令、かの番士おあさを伴れて至れば、段々の願により殿樣のお耳に入り御沙汰あり、すなはち書取に致し、八人の姓名申渡すとの言に、おあさは俯して聞けば、第一蓮田市五郎佐野竹之助、齋藤監物、大關和七郎、杉山彌一郎、森山繁之助、森五六郎、黒澤忠三郎と讀終れば、父の名あるに天へも上る心地、言はむとする時、この中深手ありてとの文言聞いて、はつと胸悸きしが、佐野竹之助は三日の夕方に落命、齋藤監物は四日に落命、外六人薄手にて無恙、此うち心あたりありやと、問はれて嬉しいのやら悲しいのやら、わつと泣き出し、お慈悲のほどありがたうござります、今はつゝみ申さず、私は大關和七郎の娘おあさと申ますもの、母には昨年の春死別れ、父には同じ年の九月生別れ、水戸城下菱屋に預けられ、三日の曉に心ならず思ひきつて一人、九日の朝出立いたし、今日お邸に參りましたわけ、この上のお情け、今生の暇乞一目なりとお逢はせなされてと、聲涙共に下りて願へば、なみ居る人々感動して、やがて越中守殿に言上するに殿にも感ぜらるゝと一方ならず。老女めされて何か命せられ、さてその娘目通りへ伴れ來よとの仰せに、家老は旅やつ

れの姿あまり見苦しと申せば、いや苦しうない、孝行もの姿形はいはず、疾くせよと、承りて此旨傳へ、おあさ伴れて御前に出づるに、旅のやつれは塵埃に著るく、見るも哀はれなるものから、見めぐる眼もと黒く淸やかに、人品のよきこと風采に知られぬ。

琴とはそちか、始めての旅行、さぞ難義したであらう、言はれておあさ平伏し、厚きおじひありがたく、唯一目父にお逢はせのほど、この上の御情け願ひあげまするとくりかへせば、うなづかれ、老女召されて、この娘ぢや、奥へとの仰せ心得て、此方へと手をとり、奥の間深く伴れゆかれぬ。

室々の女中ども、水戸から孝行娘來たとの事に彼處からも此方からも、はしり出で、噪がしく、それお菓子、お下りの餅など、おあさをとりまきて、ほめたてて、髮を結つてやる湯に浴れとの款待、此夜は暖かく蒲團夜着にまかれ、殿樣わが願を許したまふにや、父上在すは何處の室なるらんとこれを夢に翌朝となれば、昨日にもます女中の款待、嬉しけれど父の顔見てもよいとのお許し言なきうちは安心かず、當てがはれし室に獨り居るところへ、昨日の老女包かゝへて來り、殿樣の仰せと鏡臺に對はせ、髮をとして大前髮の大銀杏、結ひ了れば、取り出す大振袖の衣服一領、紫地に曙染の美ごとさ、茶に淡鼠色入りたる袴、それを身につけて見れば、天晴の姿態、老女に伴れられ、殿の御前に出づれば、御覽あつて、好き小姓になりしと微笑れ、さて、あさ。今日は父に對はするぞ。

（次號完結）

水葵

一葉庵

俳諧歳時記にいゝいかせわな引用して曰く本名蓴又鳬葵とも水鏡ともいふ菜は蓴に似て叉黄花又白花をひらく水中に生立て淑し人家近き池には生ぜぬものなり依て是を見知る人稀なりとぞ」左に記せる一話は世にも貴き難有き話なるを世の人知る事の稀ならんを思ひてものしつるからに其名をも水葵とはなしつ

頃は天正六年山内一豐祿五百石を食みて安土の城に在り、去れど家士家從も多く、武具馬具の調達、かれこれ五百石の食祿は常に不足を告げて、身につくる衣だに古び、歎くべき莚さい破れたれば、之を見る人々嘲み笑ふも少からざりけれども、一豐は少しも耻とせず、ますく勤儉を守りて、唯々士道の心懸けをば片時も忘るゝ事無かりし然るに一日一豐東人の一駿馬を市に鬻ぐを見る其價十金能く之れを辨ずるもの無し、一豐之を熱望するといへども、素より餘財の之を購ふべきなし、家に歸りて猶之を斷念むる事能はず、自ら容色憂ふるが如し。夫人之を見て其故を問ひ實を得たり、則ち秘藏せる所の嫁資十金を出して之を購はしむ。他日一豐が從四位下土佐守に任じ、食祿廿萬石をうくるに至りしも、唯此夫人ありしが故なり。

夫は昔これは叉今の末世にいやませし美談を聞くこそ頼母しけれ、膨湖島に臺灣に萬世不滅の名をとめし吾比志島陸軍少將には、兼て世にいふ武士氣質、黄金を見る事土塊の如く、且つは俠氣に富めるより、世の小人に欺かれ、終には家產も傾きて、債鬼の門に群るより、あらぬ名までも世にうたはれ、終に休職の身となりしが、忽ち日清の平和破れ、俄に復職の命ありて、征途に上る事とはなりぬ。將軍匣裡の寶刀をとつて、靜に其鞘を拂へば、霜光自ら寒ふして靈氣迸る、莞爾として一語無く、傍なる夫人を顧み一笑す。夫人も將軍の勇しき有樣を見て、悲喜交至り涕泗禁せず。將軍時に寶刀を收めて大息して曰く、多年の赤貧誠や

洗ふが如く、幸にして英氣猶存じ、寶刀猶用ゆべしといへども、馬瘦せて乘る可らず、噫之を如何、夫人容を正して答て曰く、乞ふ愛ひとし給ふ事なかれ、妾又胸算きに非ずと。

既にして將軍は廣島に向つて出發せり。當時恭なくも我至聖陛下には、鳳輦を此所に遷し給ひて、百萬の貔貅を皷舞振作あらせ給ひ、將士と苦を共にし、勞を分ち給ひつゝありき。比志島將軍にも謁見の榮を賜ひ、親しく征討の命を下され、猶蠻烟瘴雨の異土、國家の爲め朕が爲めにも自愛せよとの御詞ありしかば、將軍も早や死して餘榮ありと、感涙にむせびつゝ行宮を辭し、既に渡淸せんとする所へ、東京なる夫人の許より、一頭の乘馬をば送り來りぬ。昔廉義公の春日の逸馬にて乘られしと聞く館丸、かの中門の邸を飛越えしと聞く雲分もこれには過ぎじと見えたる名馬、群がる敵を蹴破りて四百餘州を蹂躙し、天晴れ聖恩に報ひ奉り、旁ら夫人の志に添はんものと、勇威沸勃として渡淸あり、果して非凡の功を達て、猶臺灣に押渡りて匪徒を擊退し、奮戰前に敵無く、叱咤百萬の兵、唯これ手足の如くに操縦して目覺しかりし働きは、童幼婦女も語り傳ひて、御國の譽とはたゝへける。

既にして將軍には恙なく凱旋あり、國民歡呼して到る處に之を迎ひ、至聖陛下だに優渥なる詔を賜ふに至りしかば、將軍の面目此上あらじとぞ見えし。彼の夫人よりして送れる名馬も、各所に轉戰して、鋒刃相交り、矢石雨注するの間に縱橫馳驅せしといへども、幸に微傷だも負はず、將軍と共に久々にて都には歸りけり。夫人は將軍の譽を双肩に擔ひて凱旋ありしを喜び、懸軍萬里の勞を慰めんと、種々に心をば盡されぬ。將軍は夫人を傍に招ぎ、其許より廣島に送り越したる彼の名馬は、世にも稀なる逸足なるが、價を以て言ふ時は千金猶貴からざるべし、如何にかして求め給へ

る、彼の馬ありしが爲め吾も恙無く凱旋をもしつれ、又同僚の間にも、貧すれども流石は比志島なり、彼が乘りたる馬の太く逞しさよと、賞めらるゝには至りしなり。米鹽乏しからんとせし折柄、かゝる名馬を手に入れ給ひしと、容易の業にはあらざりしならん、苦しからずば語り聞かせてよとの詞に。夫人は含笑みて、今は何をか包み申すべき、彼の馬を購ふには別に御詞の如く、財貯ありしにもあらねば、妾が衣服さては髮の具などに代へて價を調じ、廣島には送りまゐらせしなり、兎にも角にも、妾が志の程も今は遂げぬ、かゝる喜は又ある可らず、と答ひしを聞きて將軍にもいと滿足に思はれける。

將軍には其後新發田鎭臺司令長官として赴任ありしに、過般同地に競馬の催あり、將軍も彼の愛馬を去る騎手に許して乘らしめしが、不思議なるはいづれも駃足龍蹄の名し名馬と馬の集りしが內に、將軍の愛馬に勝るべき馬一匹も無く、數番の勝は悉く將軍の愛馬に歸せり。去れば此世にも珍らしき名馬を一見せまほしとて、將軍に乞ふもの日々數十人に至り、一月二月と經る程に、聞き傳ひ語り傳ひて、十里廿里の遠きよりも訪ひ來る者ありとか。將軍は之を見て今更に喜ばしく、一日夫人への書信の末に此事詳に書記し、再び其志をうくる心地すなど言越され、猶ほ都なる某畫工に囑して、愛馬を寫影せしめ、子孫に長く傳へんものをとありしより。夫人も榮ある事よとて、直に知人なる畫工を賴み、新發田に出發せしめたるは、去る月の中旬にもやありけん。武人として將軍の如きは既に稀なるに、重ねて夫人の貞淑賢良を耳にす、いかでか之を世に傳へずしてやまんや。古語に曰く歲寒ふし松柏の操を知ると、夫人の如きは則ち是なり。

笑の話（二）

北斗生

笑と笑を惹起すべき事物との理論的關係

若し笑ふ事果して人類自然の性ならば、必ずや笑と、笑を惹起すべき物との間に、明白なる自然的關係なかるべからず。其源因と結果を結び着くべき明かなる楔子なかるべからず。

快活なる少年ありて、人の將に座せんとする時、敏捷く其椅子を取り去らば、座せんとする人は床上に轉倒すべし、之の氣の毒なる有樣を見て、周圍の馬鹿者（少くとも四分の三位はあるべし）は腹を抱て笑ふなり、諸君は此無鐵砲にして危險極まる悪戯と、次で起る笑聲との間に何等の自然的關係を見出し能ふ乎

西洋等にて、風の吹く頃に、珍らしからぬ事なり。兀頭（鈴木内務次官の如き）の先生が假髪を附け、其上に絹帽を戴せて意氣揚々、十字街頭を濶歩し給ふ時、塵を捲て來る一陣の風、アワヤと云ふ間に假髪も絹帽も用捨なく吹き落して、赤裸々たる禿頭を露はすよあり、路上の愚人は之を見て嘻々として笑ふなり。

諸君は此老禿の不慮の過失と愚人の哄笑との間に、如何なる密接なる關係を見出し能ふ乎。

笑は寧ろ憤怒と羞恥の形を變へたるものと呼ぶを得ざる乎。

笑と笑を誘ふ行爲及ひ言語との間、何等自然的の關係存在せざるは事實なり。笑の習慣は矢張り幼時に馴致されたる、不自然なる聯感に依るものにして、以上の事實は此斷定の確證たるを失はず。

笑ふ事と人の品格

笑ふとが徳義上善きとなりや又悪しきとなりやとの問題は、自然脳裡に起るべき問題なり。

第一、笑を惹起せしむべき擧動及ひ言語は如何なるものなりや

第二、屢々笑ふ人の道德及び智識の性質は如何

以上二個の問題は、之を解釋するとに依て、笑に就ての疑問の上に大なる光明を與ふるものなり、

笑を刺戟すべき行爲及び言語は人類の品性を進むるに於て些の効能なし、此等の擧動は之を習練するの必要なきのみならず、注意を加ふるの價値だになし。否な、注意するべき程の價値なきのみならず、勉めて之を避け、之と戰はざるべからず、可成人間の行爲及び言語の目錄より放逐せざるべからず。

然らば、笑を惹起すべき、擧動言語は如何なるものなりや。

滑稽か、失策か、馬鹿か、野卑か、淫猥か。

是等の行爲及び言語は他人に苦痛を能ふるものにあらざる乎。

其言語及び行爲は人の品性を傷くるものにあらざる乎。

或は又無邪氣なる品よき人の顏を羞う事の爲めに崩づすものにあらざる乎。

辯捷なる山師は笑の材料たり、掏摸の失策も又笑の料たり。職業に勉强するも怠慢なるも笑の媒介たり。邪曲、騙詐、滑稽、白痴總べて是れ笑の材なり。

醉漢は輕き、意味なき笑をなす、夫れが爲め百人中九十九人迄は思考なき意味なき輕き人間と爲り了るなり。笑は實に智識と判斷力との一時の中止と云ふを得べく、心の空虛を示すものなり。

其技倆拔群なるも常に公衆の前にて滑稽なる擧動をなせしが爲め、終に碌々として終りし政治家あり。其識足らず、其擧動鈍きも、嚴正の一事を以て長者と尊めらるゝものあり、斯かる例は外國にも日本にも、現に台閣の高きに座す豪傑の方々の中にもあるとか聞けり、左は言へ徒らに沈默寡言を以て漸く己れの無識無能を裝ふ輩を學べと諸君に勸告するにあらざれども、

機敏俊英の少年は動もすれば輕擧に流れ易ければ、此邊の注意又處世に益なしとせんや

家庭

小兒に賞與を取するの可否

たんぽ

凡そ親の情として、其子を賞るを好み、懲すを嫌ふは常のとながら方法を誤りたる賞與は、不當なる懲戒と同しく、小兒の性質を害するものなり。親たるものは宜しく其子の德性を養はんとの目的にて、其性質行爲に能く注意し、善を勸め、惡を懲すべし。

勿論親の威もて一時其小兒の行爲を束縛制限し、或は命令的に善行を爲さしむることは或度まではむづかしからねど、遂は徒らに其天眞を害し、心を卑屈ならしむるのみにて、毫も益なければ、可成其自由を奪はずして、日夜彼を皷舞し、自から我まゝを制せしめ又正義を行はんと望むの念を强からしめて、其品性を養はんことを勉むべし。

さて小兒に善を奬勵する、賞與を與ふるは可か不可きかとは、家庭敎育に意を注ぐ世の母人の、心に起る疑問なるべし、なかには凡て人は習慣に最も多く支配せらるゝものなれば、幼きとき善事を爲すの習慣を養ふことは、最も必要にして凡ての手段を盡して之を養ふべし其手段の種類は假令よきものならさるにもせよ、小兒の成長の後は皆忘れらるれば憂ふの要なし、賞與の如きも善を勸むる一手段として用ふべきなりと、いふものあれど、小兒の幼稚なる腦髓には手段と目的とを辨知ると難きものにて、賞品を與へて善事を奬勵せば彼之を得んがためにのみ、熱心長者の悅ぶ所を行ふべし。これ賞品を目的として善行を手段とするものにて、斯る敎育法は、小兒の德性を强からしむと云ふこ

きか、恐くは彼善事を爲して有形の報酬なきときは、忽ち己れに利なきを曉りて、正邪に關らず、目前の利益ある道のみを撰み、遂には一擧手一投足皆已れの利不利を考へて後行ふの、卑劣き人と成長するに至るべし。

幼時家庭にて受る躾敎訓は、生涯の道德の基礎となりて容易に動かし得べからず、勿論彼成長して思想進み行き見識廣くなり行かば、或は母の膝下にてうけし敎訓の當を得ざりしことを、自から曉ることもあるべけれど、道を改むるは中々に容易なる業にあらず、實に母が日々の行爲もて其幼兒の柔き心に深く刻みつけたることは、善きにもせよ、惡しきにもせよ、生涯根跡を絶たずして、其全躰の性質に影響すべし、されば母親は其子の道德の標準を定むとも云ふべきものなれば、其標準を出來得る丈け高からしめんことを勉むべし、こは言語の敎へのみにては、假令千萬言を費すとも其甲斐なかるべし、唯日々倦まず怠らず自から好き摸範を示し彼の手を取りて正義の道に導き行きてのみ其目的を達し得らるゝなり、直ちに其結果を見ざるも、決して失望すべきに非ず、そは小兒を敎育するは恰も種子を蒔くが如く曠地石地に落ちて其實を生ぜざるものも多かるべけれど、必ず沃土に落つるもあるべし、忍耐と愛とを以て之を培養せば、漸々芽を生して遂にはいと貴重なる實を結ぶに至るといふまでもあらず。

然れば小兒をして長者の命令に從はしめ或は其義務を果たしむるに成る可く其高尚なる性情に訴へて爲さしめざるべからず、其劣等なる慾心に訴ふるは惡しゝ。例へば太郎のためには每夜八時には必ず寢に就くべき規則ありとせよ、さて其時刻に至りて「もう八時ですからおやすみ」との母親の一言あれば彼は直ちに立ちておとなしく臥床に行く樣

躾あるべき筈なれど、吾等成人にても時には己が義務と知つゝ、其を爲すの何となく物憂く覺えて怠ることもあるを、況して頑是なき太郎のことなれば、毎夜必ず母の命に機嫌能從ふことの出來ぬは無理ならぬことにて、「まだ母ちやんも兄さんも起きているのに僕ばかり寢るのは厭だ」と云ひて、中には承知せぬこともあるべし、此時母は菓子一つを持ち來りて「さあ坊やこれをあげるから寢んねおし」とか或は「明日お鐵砲を買つてあげるからねんねおし」とか云ひて、だまし賺して臥床に連れ行き寢かすなるべし、扨て初めに一度斯くなしては、其後は言語のみをもて、彼を從はしむることは一層難くなるべし、母は止むを得ず何物をか與へて其心を宥めん、斯くて之はやがて習慣となりて、太郎は何物をか報酬を得ざれば誰れの命にも從はず、己れの欲せざる所はなさぬ我儘勝手の小兒となるべし。

然れど母親はやさしき言もて八時に臥床に行くは彼が守るべき規則なれば、敗るべからず、且つ母の命なれば背くべからず、又人は誰も己が欲まぬ事にても、爲さねばならぬ場合ありて、之を忍んで爲す人こそ、眞の英雄なりと靜かにいひきかせなば、幼き太郎の心にも案外に解し得て起きて居たさの念を、自から制して母の言に從ふものなり。斯くて漸々に我儘なる感情を制して、善事を勉むるの意地を强からしめ、又假令已れの欲せざる所にても、長者の命には從ふべき筈なりとの念を養ひなば、此母は已に敎育の目的の過半を達したりと云ふべけれ。

又次郎が苦き藥を飲む時に當り傍にて可成其苦味を感ぜしめざる樣盡力すべきは勿論のことながら、「御砂糖を後であげるから是をお飲み」と云ひたきは親の情なれども「きつい兒は御藥位い何とも云はずに飲でしまひます、これ計りのことをぐづ〱云ふのは男らしくありませんからね、サア一度にぐつと飲んでおしま

ひなさい、お腹の痛いのが癒りますよ」と勇氣をつけつ、初めの一服を飲み下さしむべし、然らば二服目を飲む時にも、其言は再び次郞の腦に浮び來りて、其藥の苦味を打消すこと、砂糖よりも、却て効あるべし。

實に人生行路の難きことは、何人も能く知る所なれば、我等は子女に幼時よりつらきことと難きことに打勝つの氣性を勉めて養はざるべからず、かの如何なる逆境に出遇ふも敢て屈せず、大難身に迫り來るも毫も窮せず、從容として之に打勝つの策を考ふるの實力と勇氣とを養ふ人と些細の不都合難事の來る毎に顰面失意する意氣地なき人と何れか幸福なるべき、前者は幼時母が言のみにて苦き藥を飲めし人、後者は後にて砂糖を舐めさせし人なるべし。

躾よき小兒が其兩親や、長者の命をよく理解けて、直ちに之に從ふを見るほど、可愛らしくうるはしきものは非じ、而してかゝる躾は極めて幼時より始むべきなるに、母たる者多くは「未だわからぬから」と云ひて、其子の好むがまゝ爲すがまゝ放任なしおきて、漸く不從順、我儘の増長し、手にあまるに及んで初めて當惑し、之を矯正さんとするも說諭位の中々に及ぶべきに非ず、故に小兒の欲する菓子玩具等を與へてだましすかしてやう／＼に一時己れの言に從はしむるより、これある意味にては其子に賄賂を使ふことにて、斯かる敎育はいかで廉潔剛毅なる人物を養成し得べきや。

小兒の惡しき癖や性質は多くは其養育者の不注意、謬見の結果なるものなり、彼の我意のみ張り、他人の感情便利などは毫も思はぬ、自己中心の我子を見て「こんな氣儘な小兒があろうか」と呆るゝ親もあらんが、這は大抵小兒自身の罪にあらずして、敎育者の過ちなり、其心の雜草を嫩芽のうち拔き去らずして一度伸び出でしめたらんには次第／＼に蔓延るは當然のことなり、人多くはこゝかしこ其枝葉を摘むも其根を斷つこ

とをせざるものなり、即ち眞の愛情より出るやさしき言もて、其よからぬ心に打勝つべき方法を敎へずして、徒らに其現はれたる行爲のみを命令し、或は束縛するに留まるなり、根あれば再び枝葉を生ずるや必せり。然ればとて小兒の氣質は敎育次第にて、全く自由に變化し得べきものに非ず、如何に躾けたりとて性來物事に恐怖れ易き小兒が大膽となり、扣へかちなる小兒が臆面なしとなるべき筈少し、唯其性質に隨ひて適宜の敎育を施し或は制し或は助けて發達せしめ、以て各々最も完全に近からしむるを得これ、恰も培養によりて柿を變じて桃となすことは能はざれども、天然に人爲を加へなば、柿よりは最上の柿實を、桃よりは最上の桃實を得るが如し。

小兒は殊に他人の毀譽褒貶に感じ易きものにして、其長者に譽められ、悅ばるゝことは最も好む所、其機嫌を傷ひ惡へしむるは最も恐るゝ所なり、而して其性情は善をなさしむるの最も好き奬勵者なり、且つ之を基として眞心より善をなすのいと高き氣風を養ふことを得べし、母は其子が我慾我儘と戰ひつゝある時には、之を知覺るに鋭く、彼打勝ちなば充分喜悅の色を現はして譽め、打負けなばしか〱なれば失敗なりしと言葉やはらかに說諭しなば、彼は母が常にわが傍にありて力を添へ保護し居ると知り、而して母の喜悅は彼をして正を取り、邪を捨てしむるに大に功力あるべし。母は又何事にもあれ彼充分に力を盡したりと知らば、假令其結果は不充分なるにもせよ、必ず其盡力をほめ同情を表し、以て充分成功するまで試むるの勇氣を鼓舞すべし、實に我等子女が從來不羈自立の人とならんことを望まば、其幼時より他人の抑制によらず、自から自己を制馭し正義とする所は難事と雖も敢て辭せざるの氣性を養はざるべからず。

さて小兒に賞品を與ふることが、不可とする時は、其

德を進むるの奬勵となるべきものは絶へてなきやといふに、然らず、爰に益ありて害なく、而も最も有力なる一の奬勵かつは賞與あり、即ち兩親或は長者の温き賛言なり、扨善良なる家庭にては、親は子をめで愛しみ、子は親を慕ひかつ信ずることいと深きものなれば、萬事愛によりて活動するなり、而して小兒が最も愉快娯樂とする所は其兩親に悦ばれ、賛めらるゝことなり、彼の心は其敬愛する人の賛言をきくことに、欣喜雀躍せん、其喜ひの笑滿足の顔色を見んがためには如何なる難事も辭せざるべし、疲勞も困難も忘るゝなるべし、眞の愛情より出る一言の賛言は、彼の盡力に百倍も千倍も報ふるいと貴き無形の賞與なり。

又小兒一事に充分心をこめて爲すも、望み通りに成功せざることあらむ時父母は充分其刻苦を思ひやり、其盡力を悅ぶの旨を告げ、或は慰め或は勵ますべし、若し然らずして失敗のみを見て、冷淡なる態度をなし、甚たしきはあらぬ批評譴責などなしたらんには、彼の小さき心にも此世の無味不愉快なるを感し初め、父母を悅はするは迚も己れの及ふ所にあらずと斷念し、且つは失望し、何事も進んでなすの氣力なきに至るべし。

父母は其子に無量の愛を注ぎて、成るべく其幼時を愉快幸福にせしむべし、又害あらざる限りは、自由氣隨に振舞ふを許し置くべし、何となれば其氣樂なる時代は束の間に過ぎ行きて、浮世の義務責任辛酸は來りて、彼を束縛し、苦しましむべければなり、誰しも其子が未た世の罪に汚されぬすゞしく愛らしき眼もて、我顔を打まもり、餘念なく、笑ふを見て嗚呼此子の行路にも難事悲哀の横はり居らば、我身にかへてもそを取除きて以て歩み易からしめんものをと願ふべけれど、道は出來得べきことに非す、人各其戰ひを戰はざるべからず、故に幼時より、自から己れの短所欠點且つは難

事に打勝つの意地を養はざるべからず、而して有形の貨與の如きは徒らに此意地を弱むるのみなれば、こゝろし給へや世の慈母たちよ。

小兒の世界

うらの小山

鹽谷華園

坊の家のお裏は高ひ〳〵小山である、何故て云へば、坊が姉さんに起されてお三が酌んでくれた水で、お顔を洗て居る時、お日様か、ヤーお早うて、アノ小山の頂上のくねり松から、赤ひ〳〵顔を出して、きら〳〵と輝て、宛然笑て居らしやる様だもの、で坊はお日様のお宿のあの小山が、世界中で一番高ひと思ふ！姉さんが未だ〳〵高ひのが幾何もあるといふたけど、坊は未だ見なひから知らぬ、けーども姉さんは虚言なんか云はなひから、有るかも知らぬ、坊は何時も如斯思てる七歳に成長たらアノ小山の頂上のくねり松の所へ登て、ソシテお日様を吃驚さしてやろう！アー早く來年が來て七歳に成長ばよひ。！

お父様のお書齋には、坊には會得なひ金文字の本が澤山硝子の戶のある巨大な本箱に一杯ある。今のお三が始めて坊の家に來た時に、見せてやつたら、アノお三が大きな目をして、マーッテ吃驚した程だもの、だけど坊はお父様の本には插畫がなひから嫌さ。姉さんがお父様の様な國會議員は、插畫の本なんか見なひんだつて云ふたから、坊はモー其刹那から議員なんかには成らんのと確定てしまつた。坊が一番好きな本は、アノ姉さんの話してくれる、ワシントンのお話や、イソップ物語や、アラビ何とかいふ本さ、アノ本は插畫も澤山あるし、面白から一番すきだ。姉さんが坊が成長くなつて英語が讀る様になると、アノ本をやるといふた。

アーそうすると、坊は毎日イソフやアラビ何とかを携帶て裏の小山に登り、アノくねり松の所で讀でやろう！アー早く成長きくなりたひや。

ある日坊は、お父樣のお書齊で遊で居た時、偶然机上の大理石の彫刻像を手にして玩具にして居たが、如何致た機會か落して首を折斷た、坊は吃驚して、拾上げて、附着で見たけど、モー何とも致方がなひ、坊は泣きたくなつた、お父樣が見たら何とお云ひだろうで……坊はそつと机上にうまく附着て置た、何人も見て居やしなかつたから、坊が破壞した事は、知れやしまひ、とは思て居たが、何たか家內に居るのが極りか悪くて成らん、お母さんが何たか、坊は悪戯したねと、今にも呵りそうで、何となく面白くなひから、裏へ出て、アノ小山の方を向て、根上り松に腰かけて、眼を閉て――お父樣かものを考る時の樣に――如何致ようかと思案して居た。

坊は如何致て登て來たか知らぬか、此裏の小山のくねり松の所まで來た、坊は愉快でならなひから、四方を眺めて、アノ雪の進軍氷を踏で……と唱歌たら何所かて、バイヲリンを合せる音かするので不！思ー議！こんな山上でバイヲリンなんぞありやせんにと思て見まはすと、ズーと向ふの方から音かして來る、坊は一二一二と馳走して行て見ると、黃金の柵の一構があつて其柵內の、マー奇麗な事！宛然姉さんのお話の金閣寺や銀閣寺やあつて其又向ふにはアノ挿畫で見た、ピラミッドの樣なものやなんか坊の嘗不見のなひものか澤山あつた……樂園といふのは如斯所たろうかと其時坊は思つた。

坊は此柵へ首を差込んで見て居ると水晶の樣な小川の流れて居る傍の芝の上で坊位の男の子や女の子か、姉さんの樣な、艶麗な婦人を取圍んで、バイヲリンにつれて、唱歌つて居る、羨しくて〱坊もお仲間にな

りたひと思て居ると、其群衆の一人の子が坊を見つけ出して走で來て、君も柵内へ來てお仲間入り致給へなといふた坊は悦んで入柵ても善ひのといふたら、アノ善ともアノネズーと向ふへ行くと門があるから、其所から入柵て來給へといつて、又群衆の方へ走で居てしまつた。坊は門の方へ行ながら偶然アノ子は見た樣たと思た……能く考へたら、それは姉さんの本で見たワシントン――林檎の木を折斷て隱さなかた――である、アー、ワシントンに誤ひなひと、如斯思て歩く間に門の傍へ出た、其樂園の門の所に一人の老翁、コー純白な鬚のある老翁が居た、坊は丁寧に禮して、アノ柵内へ入ても善ひのと問たら、此老翁ヂーッと坊を見て、貴兄は今朝父樣の石像を破壞して、ソシテ人が見て居ぬから知ぬだろうと思て、御両親に謝罪なかつた。柵内はワシントンの樣な、人の知らぬ所でした惡戯を隱さずに白狀する正直な童兒の外は入柵るとは許さぬ……若し貴兄も入柵たくば御両親に謝罪てからお出なさいと、如斯云はれて坊は真心から恥て後悔して早速お父樣に謝罪る精神になつて、小山から走り降り樣として、誤て岩から轉々と轉下た、アツト吃驚してお母さんて呼だと思て目を開たら、今まで背にしていた根上り松から、芝生の上へ轉落て居た。坊は早速起立て家内へ行た。丁度其時姉さんが茶を煮て、お父樣、とお母樣とか何か笑話致ていらしつた、お母さんが坊を見て、何所で遊て居たの、今まで探索て居たとおつしやつた。坊は今までの出來事をお話して更に謝罪た。お父樣はハー夢を見たなつてておつしやつた、お母樣は夢に神樣が敎訓なさつたんだとおつしやつた、姉さんは笑て、然矣よて云つた……お坊は如何しても夢とは思はない、何時でもアノ小山へ登行は樂園があつて其所にはワシントンなんかゞ居ると思ふ。

其後或日後園の芝生で姉さんにペイヂリンを彈てもら

つて、坊がお得意の雪の進軍氷を踏で……を唱て居た時偶然前日の事を想起出して小山を見上げたら、アノ頂上のくねり松が風にゆられてチイデチイデをして居た。

アー坊が小山へ登行るのは何時たろう？ソシテ樂園を見るのは……

（完）

文藝小説

おとめの記（五）

橋亭主人

明治二十三年の正月、河端のおとめが家には無花果の樹が後の茶園に移され、其空地へ新らしい瓦屋根が繼ぎ延べられ、左の道に添ふて白木の格子窓附き、庭には花木が植わり、其周圍に離が繞らされ、其れと共に店に並びし菓物草履は撤去られて、鳥渡見た所では清流に添うた別莊の樣な作りとなつて居て、家の中にはおとめと、周造との外に、彼の學校の教師なりし遠藤が主人となつて住まつて居る。

おとめと遠藤とは遂に夫婦！、兩夫に見えては死んだ三五郎さんに濟まないといふた所のおとめは畢竟其誓詞を破つたのか、其れとも他に已むを得ざる事情があつて此くなつたのか。村の者のいふにはおとめは初めの程は絶つて操を立てるやうにいふて居たが、あの遠藤を如何だと人が勸めた時、おとめは存外脆ろかつた、其れでも二三度は矢張り拒絶はしたれど、遂に三五郎の遺財を危急より救ふた人といふ點より、其性質が確かりして居て丁度三五郎を見たやうな人といふ點よりおとめの父も亦近所の人も之を勸めたので、おとめは遂に其言に隨つたのである。

然るに遠藤が入婿となつて後は、一家の方針が全く一變した、三五郎時代より今まで續けて來た店の商賣は

廢業して、家の作り方も自づと變り、そして遠藤は學校を辭職して、三五郎の遺産を何事かの商法に用ひやうと考へた。

頓て此川に添ふて上流十里の間に荷物を運送する所の牧田運送店といふ看板の問屋が出來、尋で此運送をなすと共に上流の山家から運び出る所の材木薪炭の問屋も出來た、是れ皆な都會的腦髓を有する遠藤が三五郎の遺産を十倍二十倍に殖やさんがため、經營し初めた仕事であつた。

然れども成功が少くつて失敗の多い世の中、遠藤の此事業は初め一年許りは好景氣に見えたが、段々風向きが惡るく、二年目の暮に至つては殆んど目途が立たなくなつた、品物は賣行ず、金の融通が惡しくなる、最早や長いことはないとの評判が近處に傳へらるゝ頃はおとめの家には憂患の雲が其日〱蔽ひ重なつて來た。

時は舊三月三日のとで、村の女小供は雛人形を並べて今日の一日を樂しみ狂ふて遊ぶ時節河端のおとめが家には痛ましい出來事が起つた。損毛だら〱の家を殘して遠藤は何處へやら逐電したのである。

是は何事ぞ、債主や荷元のものどもは之を聞て飛んで來る、各々おとめに迫み込んで義務償還を請求する樣は、恰で一塊の殘肉を數虎の爭ふが如く、おとめは殆ど失神狂亂する許り、今や積んである品物の外に金とては一文もなきに如何して處置して宜いやら一向分からぬ、三五郎の汗膏で蓄めた金は烟りか、夢か。

今やおとめが天地は總べて黒い火、濁つた水、おとめが周圍は總べて逆風、怒濤である、破壞、滅亂である。

悲しいかな彼女を非難する聲は漸く高くたつた、村婦等が相集つて話す事、若者等が畑に出づる路上話は、おとめの不埒、三五郎の恨みと云事のみであつれ、おとめだに初心を一徹に貫いたなら決して此樣な事はな

かつたに、三五郎に叛むいて二度目の亭主に勝手にさした其報だ、折角三五郎が骨を碎いて蓄した金も、今は其の爲めに何んにもなくなつた、おとめさへ辛抱すれば其内に小供も太きくなる、千兩の金は何處か慥かな人へ預けて利に回はして置けば、此位い大丈夫な事はなかつたのに、餘り遠藤を賢い者と思つたからツイ失敗したのだと、老人連も今更になつて知つたふりをする。

おとめには後悔の涙が腹を剜る樣に出る、在つたものは借金取りが名々に分けて持つて去つた、殘るものは此家許り、詰り三五郎が海山越えて三年も働いたのは水の泡、周造の身代と思つたのも朝の間の露、誰れが此んなものに仕たぞ、皆な自分の仕業だ。

何處の國、何處の村にも千百人の中には必らず他人の失敗を見て喜ぶものが居る、丁度おとめが此樣な境遇に落ちて、思を千々に碎く折り、村の中には無情の流行歌を何人となく歌ふやうになつた。

おとめは三五郎に對して良心の責がある上に、世間のものが彼是れいふのを聞き、又た由なき流行歌の自分の身を嘲けるを聞き、殆んど胸も裂けるやうだ、若し死んで此耻辱めを免かれなければ、氣が狂つて了うは正當の順序だ、故に村の情けある人々は甚だ氣遣ふた、そして彼女を其家に訪い、其悲哀愁嘆を慰め、人間萬事因緣づくなる事、幽愁の餘り世を墓なむことのないやうにと度々いふてくれる。おとめは之を聞く毎に、世の中は未だ自分を見棄てぬことに心付き、時には心を取直して寺の説教に參り、因果の理みちを聞くが、讀經にも鐘の聲にも先つものは無常の涙!。

大應寺山より出で、消えゆく浮雲の影を眺め、終古流れて盡きざる今津川の水のありさまを看、深夜沈燈の下己が過去現在の悲劇を考へし時、寧そ、死んで三五郎ぬしに申譯けをしようかと思ふことと度々あれど、不

便の周造が苦もなく眠る顔を見る時は、世の中は猶ほ見限られぬ。

＊　＊　＊　＊

三五郎ぬし、三五郎ぬし、許して下さい、許して下さい、悪るかつた、妾しの心が一時迷つたのが悪るかつた、何んと言はれうとも妾の罪はのがれない、萬望許して下さい、この周造にめんじてゆるして下さい三五郎ぬしとは、おとめが夢現にも口走る良心の責苦である。

此に改悔、責苦のある上に、村人はまた〳〵不仕合せなるおとめを見ねばならぬ。

此頃此の近在には赤痢病が流行して、何れの家に行くも、病氣の襲來は今日か明日かとの感念を以て怖れて居る、おとめは此の有樣を見て、自分は却て病に罹つて死んだ方が宜いと思つて居れど、如何かして周造が無事であれば宜いがと、恰も薄氷を踏みつゝ歩るく樣に思ふて其日を暮す。

然れどもおとめに幾千石の慈愛なる涙ありとも、其涙は遂に周造を病より保護することは出來なかつた、悲しい事かな彼れが氣分悪しゝとて學校より歸へりし時、おとめは氣も氣ならず。

一日二日と經ち三日四日と過ぐる内に、病勢も段々強くなつて擬いもない赤痢病となつた、一昨日は平右衛門の娘も死んだ、昨日は長藏の次男が死んだ、今日は遂う〳〵戸長さんの國坊さんも亡くなつたと、毎日〳〵大人や若い娘や小供が、後を追ふて墓場に送らるゝを見て、おとめは苦し相な周造を抱いて泣く、今日は此方の番か、明日は此方かと思つて。

病氣に罹らせまいと思つたおとめの勞も、遂に効なかつた如くに、死なせまいと思ふ千々の心も矢張り無効なのだ、哀れ周造は十日目の夜、不仕合せなる母親を、暗黒孤獨なる生涯の淵に投げ込んで、天路遙かに

父の跡を追ふて去つた。昨日まで淺瀨の魚を裾を撑げて逐ひ、又は近所の子供と輪を回はしなどして遊んだ可愛の周造は、あの墓塲といふ寂しい群には入つて了つて、母親を見向もしない、前の淺瀨は舊との如くに流れて、其中には周造に逐はれた魚も居ろうが、彼の兒の影は見えない、河端から村の土手までの一本道で四五人の小供が鬼戯をしたり、輪を回はしたりして遊ぶけれども、皋んな他家の兒だ、今は三五郎も去つた、三五郎の蓄めた金も失くなつた、生きたる三五郎の遺產も死んで了まつた、最早や何を賴みに生きて居ろうか、我れには天地もない、日月もない、人間もない、亦た自己もない、唯だ三五郎ぬしに對して操を破つた大罪が一つ殘つて居る、おとめは憐れにも然う思つた。



同情ある村人は勿論、嘗て彼女を冷評したる者までも、おとめの降り積もる薄倖を憐れんだ、淚早き婦女どもは家に就き又は路に逢ふておとめに悔みをいひつゝ袖を掩へどおとめには左程の淚もないやうに見える、嗚呼世といふものを失へば早や人には淚なしとよ。

野邊の送り濟みて墓參の七日目、おとめは心細き線香の煙の夕空に消えゆくを墓なみつゝ墓塲を出だ。

十月五日の弦月、老楠の枝に潛みて、凄然たる其影を川面と竹藪とに曳きつゝ、時に老梟の聲が此寞寂を破るの外、一面は恰も死の世界だ、とき〲下流の渡塲

で渡守を呼ぶ聲が陰氣に聞こえるが、是れも招魂場山の崖緣を走る人力車の灯燈と共に消えて了つた後は、唯だ浮舟に似たる月影が、一條の荒徑を辿る人影を、磧の上に朦朧と投げる許り淺瀨に落つる水の音は彌增して寂しく聞える。

＊　＊　＊　＊

其夜徹宵おとめが家には物騷なる提燈の燈が絕えず往き交て居つた、おとめの實母は氣狂のやうになつておとめは居ないか、おとめは何處へと叫んで居る、おとめは日の暮れ前に墓參に行づたまゝ今に歸へつて來ないからである。

夜が曙けて日も未だ出ないに、今津川の上流下流には數多の小舟棹され、人は熊手樣のものを以て川底を搜り、河岸の處ろ〳〵には多くの村人が集つて、皆な愁然たる顏を低れ、そして舟の彼方此方に動くのを眺めてをる、殆んど正午に垂んとする比、水猿猴棲むと言ひ傳へられたる淵の底より、おとめの死骸は引揚げられた、嗚呼言ふも哀れである。

おとめは遂う〳〵身を投げて死んだ！との悲聞は恰も急使の樣に全村近鄉に傳はつた、之を聞いたものは皆んな哀れを催さないものはない、彼女を祐護つたものも、嘗て彼女を嘲つたものも。其後直に招魂場淵の磧に於て、幽魂を吊ふ施餓鬼は行はれた。

淚を以て通されたる村家の中に、最も多く、最も甚しく慟哭したる一人がある、其人施餓鬼の塲所に在つて衆くの人の前をも憚らず哭き、施餓鬼が濟んで後も、門徒寺に日參して、三五郞、周造、おとめ三人の亡靈に念佛を誦げ、是れより後は其身を全く佛事に委ねて浮世の事を打棄てゝ了つた、抑も、其人とは誰れであらうか、惡魔の生れ替りと言はれたる三五郞の繼母である。

＊　＊　＊　＊

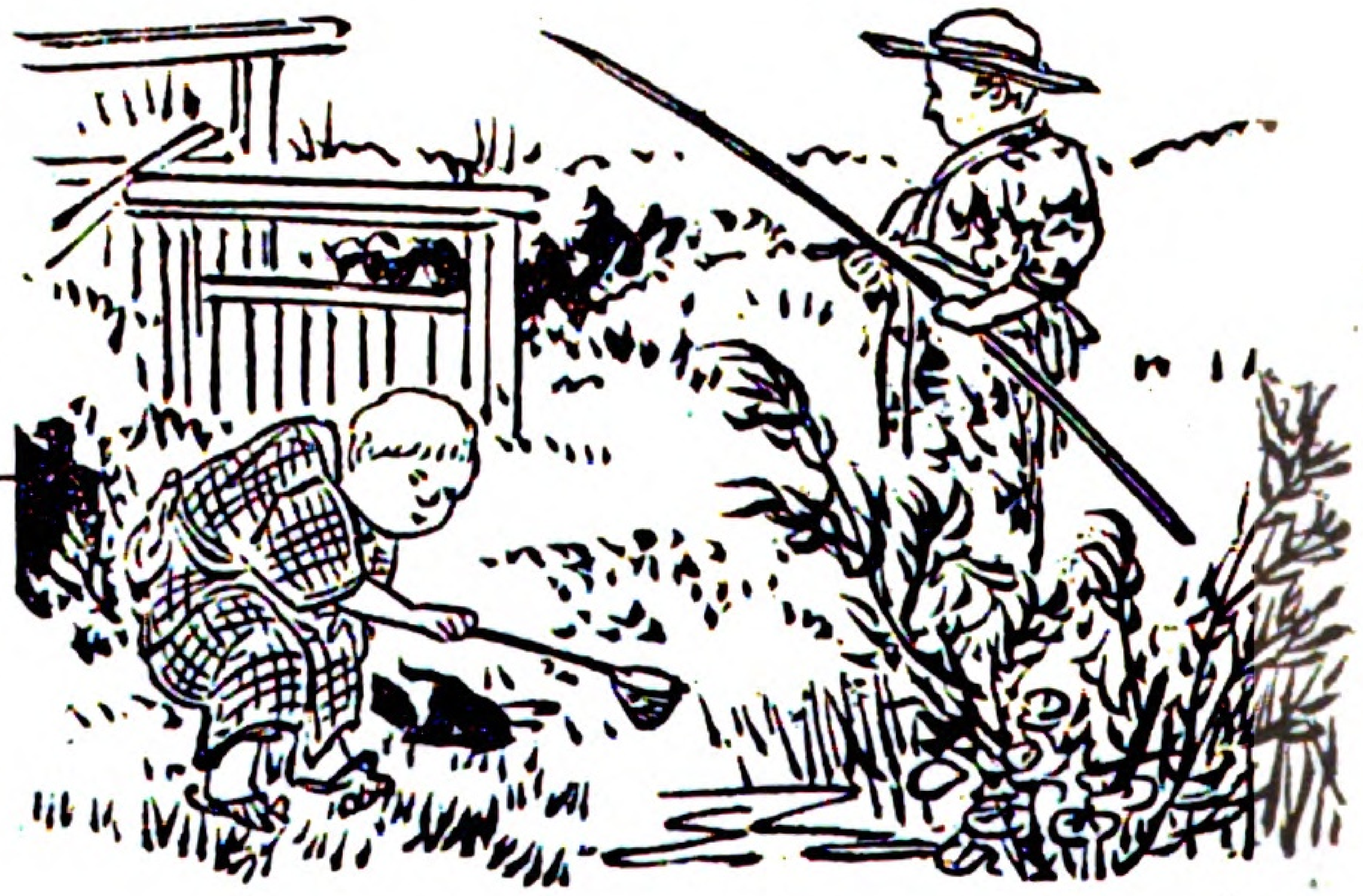
是等數年の出來事に依つて發心せる本家の繼母は、全く三五郎の前に悔ゐ改めた、三五郎は幾千の黃金を以て彼れに勝利の光りを示すよりも、一層進んだる大勝利に相違ないが、然れども之れが爲めに犧牲に供へられたるおとめが一生の酷薄を見る時は、彼女は此くの如き悲慘を嘗むべく特別に生れたのか、今も猶ほ村の記錄は涙の滴！（をはり）

深山の夏

雲莊子

けさはうれしくも雨摸樣とおもつたのは誤りで、橋根の外を通る二人の朝顔賣の「けふも暑くへげそうですね」と云ふ聲きこえしほどもなく、一面にたてこめたりし霧は一重々々と衣をはがすごとくに、へげて、傳通院の森も、五郎兵衞山の森も、今はよく見え初めると、暑の神の護光かとばかり、日光はきらくと窓よりさしこんできて、見るだにあつき青空が見えてきた。

あゝ、けふも暑いのか、きのふは九十度、一昨日は九十一度、東京の夏はげに苦しい、それからおもふと去年行つた赤城などは暑さなどは夢にも知らない所で、あゝ考へだすと今にもゆきたくなる。



樂天

上野を朝出發した汽車は、乘客の汗一斗を乘せてひる前に前橋市についた、我はぶらくとひとりその町を通りぬけて、前方遙かに火山的の裾を長々と敷ける赤城の山、その頃は濃き白雲に閉ざゝれた山邊を指して行つた。

田畠を通ると桑のはたけに入る、桑の海とも云はうか、目もはるかに連れるさまは我が始めて見る所で一種のおもしろさを感じた、が、この桑の海のあつさは又格別である、日は遠慮もなく頭より照りつけて、わが背は汗の瀧つ瀬とも云はうか、路ばたから立つかげろふのゆら〳〵ゆらぐ影をみても、目がくらむばかりであつた。

二里ばかりして漸く山邊にゆくと、はや、かな〳〵、蟬の聲が木影から交る〳〵聞え涼しき風も時に袂を吹いた、是よりいくつかの荒村を過てゆくと氣候は漸々涼しくなり、山を上りつめた頃は午後五時過てあつたが、しばし足を休むるために路傍の枯木の上に踞する時しも、雲霧蓬々と吹き來つて、さきの暑さは夢の樣に忘れはて、汗は氷るかと思はれてそゞろに寒くなつてきた。山の中とは云ひ乍らかくばかり溫度のちがふものかとおもひつゝ大洞の方にゆかんと急いだ。

尙一里の牧牛遊べる草原をすぎてゆくと、日は漸く沈んで殘んの夕ばえうつくしく、ふと樹間にみえすきし瀲灔たる湖水が紅に映じた時、深山鳥のなきいでゝ靜けき深山をばそのさゝやかなる聲にいよゝ靜かにならしめたる時である、あゝ、今おもふも恍惚として魂はその時にとぶ思がする。

一點の燈火をたよりて湖畔の猪谷と云ふ一軒家についたが、さて爐火のもとにて食事する時、白雲は容赦なく窓のすきまより入りこみ來て火影おぼろになりしをみて、我は深山の面白さを感じた、そして其眠る時の興はいかなりしとおもひたまふや、近き梢にほとゝぎすがなき初めて、一ッ二ッの螢がふわ〳〵と我が枕邊をとびかふた。

夜になつても戶を閉さぬ、盜賊の憂はとわがあやしみ詰つたのに、家の人々はそれは里で云ふ事だと答へた、遙る〳〵と雲の上に天國を求めずともよい、理想上に

のみ得べきものでない、天國は即ちこゝにあらずやと
われは自らほゝゑんだ。
この處は寒暖計酷暑と雖も八十度を超えた事はないので、朝夕は大概六十度と七十度の間を上下して居る、されば袷衣が通衣で、それでも常にたける爐邊のほだ火に近寄りがちの有様である。
爐火をかこんで互に山人のはなす話のいかに興あるかは都の人にはとてもわかるまい、われには耳新しい事ばかりで、猪のあばれた話や、猿の助を乞ふた話や、山犬のおそろしき事や、沼の主をみた事や、或は山姥、山男、大人道やら、一ッ目小僧やら、いろ〳〵かたりつゝ笑ひ興ずるさまは無邪氣さの極りで、一點罪のない事である。



沼は周圍二里餘もあらうか、四面には峨々たる山岳の深林が取り圍んで、小波だに起らぬ水の恐ろしきばかりの靜けさ、此沼に對すると一點の塵も心に殘りえまい。其沼を取圍む峯の黒檜地藏に上つたが、又、その頂の眺の壯大なることゝ云つたら何と譬へたらよいのであるのか、白雲は低く沈んで遠くは越後より信濃、甲斐より駿河にかけ、一方は上野下野遠くは奧州の方まではのかに連れる群峯の頂の浮草の如く漂へるを見た時、我は崇高の念にうたれて、うたゝ自然の美を嘆賞して止まなかった。
雲霧の谷底より猿の叫聲をきいた時もこの時で、沼に住める六尺餘の赤魚を見たのも此折りであつた。

あゝ、今にも行きたいのはあのところである、あゝ、あの白雲はどこへ飛んでゆくのだらふ、自由自在雲の如く身もとびゆくをえたならば、いかにたのしい事であるだらうか、いかに心ゆくことであらうか。

雜録

鳥獸の臟腑藥となる

邊雀生

昔からの口碑と云ふものは、案外に多くの眞理を含んで居るものでありまして、今の人はよく之れをけなしますれども、それは生物知りの致す事で、博學なる學者の致すとではありません。其證據には、近頃學術も段々進んでまいりまして、一寸聞いては馬鹿らしい樣に思はれて居た口碑も誠に深き道理のあるとが漸く分かつて參りました。是れから申上げます御藥の話は其よき一例であります。

佛蘭西と云ふ西洋の國にては、鳥や獸物の肝臟とか腸とか膽とか脈管とか總べて躰内の臟腑を乾かし之れを粉に致しまして、藥に用ゆる習慣が昔より有りましたが、其後學術が一寸開けました時、日本と同樣に、忽ち之れを攻撃しまして、山の奥の田舍人の外は用いぬ樣になりましたが、近頃になりまして、それに爭はれぬ道理の有るとが發見されました。之れを最も明白に證明した人は、同じ佛蘭西のフィサリースと申す學者であります。

此學者が説明いたしましたのは、蛇の事でありますが、此人は醫學の説に「毒を以て毒を消す」と云ふとがありますより思ひ付きまして、蛇が人を嚙みますれば、怖ろしき毒になりますれども、毒になる程なれば、又た其毒を打消すか、さなくば其毒を弱はむる力のある毒が蛇の躰内に無ければはならぬと考へまして、それから毎日毎夜食ふとも寐るとも殆んど忘れる位に勉强致

しまして、色々と蛇の躰を解剖したり分析したりして研究致して居りましたが、遂ひに其目的を達しまして、蛇の膽の汁の中に「コレステリン」と申しまして、蛇が人を嚙みました時の毒を打消す力のある毒のあるとを發見致しました。言ひ換へますれば、蛇の齒には人の躰に非常に害になる毒がありますけれども、若し蛇の膽の汁の中に在る「コレステリン」と申します毒即ち藥を附けますれば、縱令嚙まれても害にならぬと云ふ事を發見致しましたのであります。之れは勿論學術の上に最も有益なる發見でありますが、又た先き申上げました、鳥やら虫やら總べて動物の臓腑を乾かして粉にしたものが藥になると云ふ道理をよく説明するものではありませんか。今一層詳しく申上げますれば、蛇に嚙まれた時蛇の膽を乾かして粉末にしたものを附けますれば其粉の内に先きに申上げましたコレステリンと云ふ藥があります故自然に癒えるのであります。斯の如く蛇の膽でも藥になりますのですから。外の動物の膽とか肝臓とかにも藥になるものが多くある譯なのです。



先に毒が毒を消すとか毒が毒の力を弱はむるとか申しました故御婦人方には御怪しみ成さる御方もありましようが、之れは赤ん坊を御産になつた御方には直ぐ分かる事でありますので、赤ん坊が産まれる、ちきに大きくなる、樂しみなやうで心配なもので、第一番に御騒ぎになるのが種痘でしよう。其種痘が則ち好き例であるのでありま

す。元來種痘とは牛痘と申しまして牛にはへた疱瘡を赤ん坊に種えるのでありますが、牛痘も天然痘と同じ毒ではありますけれども、其力が天然痘程強くありませぬ故、人躰に種えても左程害を致しません。それにしても何故其毒を種えますかと申しますと、人の身躰は不思議なものでありまして、初じめ弱はい毒を種へますればあまり害を受けませぬばかりでなく、だん〳〵強よひ毒を種えましても、同じ毒なれば少しも害を致さぬやうになるものであります。種痘をすれば天然痘に罹らぬと云ふのは全く此譯で、初じめ牛痘の弱い毒を種えますのは後に天然痘の強い毒に罹りても害を致さぬ爲めの豫防であります。斯く申し上げますれば、先きに毒が毒を打ち消すとか毒が毒の力を弱はむるとか申上げた譯が御分かりになりましよう。此頃天然痘が流行しますと、政府から成人にも種痘せよと八釜しく申しますのは、一度種痘をして居りましても、其毒が無くなつて居りましては、天然痘にかゝりました時、其毒の力を弱はむるヿが出來ぬ虞れがあるからであります。

是迄は毒にて毒を打消す（打消すと申しては充分ではありませんがマーこうして置きましよう）と申すヿと、毒で毒の力を弱はむると申すヿを混合にして申上げましたが、其實此二つは別なことでありまして、毒で毒を打ち消すのは、昔からやり來つた、藥で毒を去るのを申すので、藥と申すものは、無病の人には多少毒であるヿより見ますれば、即ち一の毒を他の毒で打消す譯でありますが、毒で毒の力を弱はむると申しますのは、之れと違ひまして、前に牛痘の例で説明した通り、或る毒を用いて同じ種類の毒の力を弱はむるのであります。此原理はほんの十四五年前に發見されました新説なのであります。尤も種痘の行はれる樣になつたのはそれよりズット前でありますけれど、其時は唯だ

種痘をすれば天然に罹らぬと云ふ事實を知つて居た丈でありまして、此原理の確定されたのは、まだ新しい事なので、殊に細菌學と申しまして、多くの病氣の原因は、細菌と申して、人の目には見えぬ極めて小さい毒より起るとヿを説きます學問の起りまして以來益々明白になつたのであります。近き例を擧げますれば、北里博士が獨逸で研究せられた説に據りますと、破傷風と云ふ病は矢張り一種の細菌即ち毒から起るのでありまして、日本では昔不治の難症と唱へたものでありますが、初じめ人躰に、其細菌即ち破傷風の毒の力の弱はいのを種へて置きますと、其後之れに罹りても、少しも害を受けぬと云ふ事であります。其外虎列刺、腸窒扶斯などの怖ろしき病氣も矢張各々一種の細菌より起こるのでありまして、諸學者は是等も其毒を弱はくして種ゆれば、其病氣を防ぎはせんかと色々研究して居る位であります。

それにしても、同じ毒が同じ毒の力を弱めるとは少しく不思議のやうに思はれませうが、其譯には色々の説がありますので、其内一番新たらしい一の説によりますと、元と動物の身躰と云ふものは靈妙不思議に出來て居て、一度其身躰に堪へられる丈の毒に罹かりますと、其後それより強よい毒に罹つた時其力を弱はむるとの出來る物質が自然に躰内に生ずる様に生理機關が備はつて居るからであると申すヿです。種痘の例で申しますと、牛痘の毒が人の躰内を廻る内に血や何かと



水中の美人

混合して一種の藥の樣なものを造くり出しますから、天然痘に罹りても此藥が天然痘の毒の力を弱はめると申すのであります。又た小さい腫物などほつて置て癒えるのも其理であります。

そこで御話がずつと前に戾りますが、蛇の膽の中にコレステリンと云ふ藥があるのも、同じ道理でありまして、蛇の毒は蛇の身躰に取りても矢張毒であるのに相違ないので、コレステリンも矢張り蛇の毒が蛇の身躰を廻る内に生じたものであると云ふ事であります。

此道理を段々推詰めますと色々面白きとがありますが、枝葉にばかり渉りましてもいけませんから、今一つ二つ御話の主意なる鳥や獸の躰が人の藥になる御噺を致しましよう。昔しアチリースと申す種族にては、青年の英氣を養ふ爲めに其母が獅子や虎の腦髓を喰はしたと申し。其後歐羅巴各國に於ても此風習行はれまして、子供の知慧を附けけん爲めに色々の動物の腦髓を食はせ、甚しきは鳥獸の血やら分泌物迄人躰の藥になると信じて居りました、又今日でも亞非利加邊の野蠻人は勇氣を増す爲めに人の心臟を喰つたり、鳥獸の生肉やら臟腑を食つたりして居りますそうです。

そこで前に申上げましたフイサリースと云ふ學者は、新説を立てまして、人が局部の病氣に罹りた時は他の健全なる動物のそれと同じ局部を服用さすれば容易く全快すると申しました。譬へて申しますれば、人が肺とか腸とかの病氣に罹りますれば健全なる鳥か獸の肺か又は腸を服用すればよろしいと申すのです。此説は七年許前にもブラウン、シークワード及びターンンサアルと申す學者も唱へたとがあるそうであります。

烟草談（承前）

無名氏

喫煙家は兵士に不合格なり

左は米國ヲハヨーリハブリカン（雜誌）に掲載ありし所なり

此の度の米西事件に際し米國にて義勇兵を募集せし所應募者にして身躰不合格なりし者の餘りに多かりしに目下しきりに其原因を取調べ居る由なるが躰格撿査醫の語りし處によれば應募者中禁煙家にして不合格なりし者は彼の千八百六十一年の南北戰爭の折よりも其數尠かりしも喫煙家は百人中の九十人までは不合格なりしと。

南北戰爭中ニユーヨークベンシルヴアニヤヲハヨー等に於て常に兵士躰格撿査醫の任務を負ひたりしドクトルキングル氏の曰く、此度の新兵募集に就いて新紙の報ずる處によれば、不合格なりし人々の多くは心臓の健全ならざる者か、或は兵士に欠くべからざる活動力の不充分なる者なりしと、而して余も今は彼の南北の役の折に比すれば不合格者の多少多からん事を期せしも、其數三倍にも及ばんとは思はざりき。且撿査醫等の親しく語る所によれば、斯く不合格者の多數なる所以は應募者の青年にして、巻莨の奴隷となり居る者多きによると實に慨歎の至りなり。



かげろふ

少年と喫煙

喫煙は成人を害することも尠からずと雖も、殊に少年を害すること甚だし。即ち喫煙を嗜む少年は其身躰の發育充分ならず成人たるべきの年齢に達せざるに早熟し、又虚弱にして身を終る事往々あり。嘗て佛蘭西の一名醫常習として

喫煙せる九才より十五才までの兒童三十八名を試驗せし所、中九名は確かにニコチン中毒の徵候として智力に於て大に欠乏せる點ありて、且アルコール性の飲料を熱望し。三名は心臟病に罹り八名は其血液の質惡しくなり、十二名は屢々鼻孔より出血を起し、十名は夜中稍もすれば安眠するを得ざるの癖あり、又四名は其口內の粘膜に腫物を生ぜしといふ。

喫煙と遺傳

喫煙家に向て莨の害を喋々述ぶるも、多くは已れ嘗てさる害を蒙りしことなければそは中には信じ難しと答ふるなるべし。斯る人々に對して吾人一言すべきことあり、即ち喫煙家の血液唾液等には、莨の毒混合し居り、又腦髓神經は多少其中毒にて痴鈍となり居るが故に、其子孫に疾病多き身躰と薄弱なる精神とを遺傳す。而して身躰精神共に不健全なれば動物性の肉慾のみ發達し、智性德性は漸々力を失ふに至るべし。父の罪が子に報ひ來ると即ち遺傳の恐るべきことはいふまでもなきとなり。

莨の害が個人の上に現はるゝ如く、國民の上にも現はるゝや必せり、爰に倔強なる躰格と躰力とを有する一人種あらんに、其子女をして幼時より喫煙の習慣を養はしめ、成長するに及んで互に相婚せしめ斯くて幾代も經なば、其子孫の躰格は次第々々に衰へゆき、遂には其祖先より數等劣りたる人種を見るに至るべし。げに神經系統を強く壓迫して直接に心臟に作用し、又血液中に毒素を混和し、以て、生命の根源を惱殺する毒物こそ、人種を衰頹せしむる能力を有するや疑もなし。

喫煙と飲酒

人、喫煙すれば口內の粘膜は弛みて多量の唾液を分泌するが故に、消化機能を爲すに當り、大に唾液の不足を生ずるなり。凡そ躰內に不用なる水分並に鹽分を躰

外に排泄するは、主として腎臓と尿道の用なるを、既に口中にて多量の水分を排泄すれば口は消化機たるの本領を棄て、排泄機となり、又腎臓尿道は、己が職分を他人に奪はれて、簡慢懶惰に日を送るに至るべし。而して口中にては食物消化の用に供すべき唾液を多く徒費し、鹽分のみを餘すを以て大に渇を覺ゆ、隨てアルコール性の飲料を羨望するに至るべし。故に喫煙と飲酒は甚だ密接の關係を有し飲酒は喫煙より來る事多ければ、人禁酒せんと欲せば先づ禁煙より初めざるべからずと云ふ。

喫煙と傳染病

喫煙は血液を過度に流動せしめ、赤血球に變状を來たさしめ、胃弱を起し心臓の力を弱め、且其運動を不規則ならしむるを以て、煙草製造者や喫煙家は傳染病に感染し易く、且つ容易に快癒し難く、幸にして死を免るゝも以前の健康には復すること甚だ難きものなり。

又莨の煙が屢々彼の忌むべき口中及び氣管の腫物の傳染の媒介をなすことあり且つ患者が用ひし煙管を用ゐて其恐るべき病毒に感染せし例も尠からず。



莨が精神上に及ぼす害

以上は皆莨が身躰上に及ぼす害なれども、尚恐るべきは精神上の害則ち智力を衰へしめ、德義心を微弱ならしむることとなり、記憶力の如きは、殊に其影響を蒙ること著るしきものなり。

佛國巴理の或る學校にて、いと面白き統計作られぬ、

そは生徒の喫煙家と禁煙家とを別ちて種々なる學問上の試驗を行ひし處、其成績喫煙家は禁煙家に劣りし事數等なりしと、又喫煙家は入學試驗にても、通例下位を占むるが上に、進歩も遲ければ遂には禁煙家と懸からぬ懸隔を生ずといふ。

米國カルホルニヤ洲の公立小學校に於て、男生は女生に比して一般に其成績惡しかりければ、評議員は遉は教授上教員等の注意の足らざりしためか或は其訓陶宜しきを得ざりしに因るならんかと、種々取調べたるに、遂に十二才より十五才までの男生は百人の内九十人までは常に卷莨を吹かせしを發見し、是ぞ學力劣等の原因なりしと知りたりといふ。喫煙家或は云はん凡そ過度に喫煙すればこそ其恐るべき害も身に及ぶべけれど、其分量だに制限せば毫も差支なしと。然れども世人の熟知する如く凡て魔睡劑や興奮劑の類は用ひる度毎に、幾分づゝか其量を増さゞれば効を奏せざる者なり。而して適宜と過度との境界は至りて不分明にて、線を引き難きものなれば、喫煙の如き人一度其味を知りて用ゐるの習慣を作りては、いかで其量を制限し得べき、次第々々に其量を増加するに非ざれば、滿足せずして遂には其奴隷となりて身を滅ぼすに至るべし、然れば讀者よ莨の害を悟り給はゞ、度を過さぬ様注意すと云はず、斷然之を棄て給へ殊に願はしきは後來我國の榮枯盛衰に直接の關係ある少年には初めより此毒草を手にせざる様勸誘し、以て災を未發に防がんことに盡力し給はんことなり。茲は世界に雄飛すべき國民は強壯なる身躰と健全なる精神とを要すればなり。

(完)

社會

東京風俗一斑

其村

（改むべき女子社會弊風の一面）

東京女子社會の改むべき習慣風俗多きが中に、游藝しつけの事はその一なり、今記して參考に資す。

（一）稽古屋の揃ひ

およそ東京中等以下の社會にて女の子持てる親々の必ず敎ゆべきことゝ思ひて各々其子をしも通はしむる所謂稽古屋たるもの、數およそ何程のおほきやあるべき容易には調らべもつかぬ程なり、或は常盤津といひ又は清元といひ其他長唄に又は端唄にたゞ其流派について見るも蓋し十種以上はあるべし其一種一派何れにも其一統をすべ帥ひける家元といふものありて種々種々の干渉をなす中に取別けて毎年一度恰かも中元の頃においてお揃ひといふものを出だす即ち其流派々々の家元の紋たとへば常盤津の角木瓜清元の三柏なんどを樣々新らしき形に崩して染め出したる浴衣地なり是れを何れも其配下なる市內の稽古屋に配して賣らしむ或は百反五十反其弟子といふ人々に賣る數の多きは實に其家の盛を示めし家元の用ちひ自からよしされば出入る弟子たちの何れといはず皆麗々しげにこれを纒へる到る處に見る處なり小さき娘ども然かも學校の敎室にまでこの揃へたるものを着て行くあまりのことゝいふべきならずや



夕すゝみ

（二）常盤津

女の身にはなくて叶はぬたしなみの一つなりと認められたる各種遊藝の中について尤も流行の盛んなるは實

に常盤津となす其數如何といふに他のものに比しては割合に易く且つ又餘まりに多く聲を要せざる處より自然此方にむくるのおほく何時しか斯くなりしとおもはる、然して其曲といふもの流石に新内などいふもの程にはみだらなる節もなけれど皆如何はしきもの許りなり極其手ほどきの時に敎ゆる將門といひ殊とに其關の戸なんといふにありては聞くに堪えざる文句多ほしさるを因習の久しき幼き子供に唄はせながら母などの不思儀ともせで聞き居つゝある誠におかしなことゝいふべしさて改むべきものゝ一ならむ。

（三）稽古の數々

世に淺はかなる母親ほどおろかなるものは又とあらず女の子はすべて己れがための翫弄物と心得或は他に驕る道具と見なし樣々とおろかしきことをなす中は取別けてこれが仕入といひ仕付けと稱して樣々の、稽古世に益もなき事を敎ゆる殘酷至極のことなり。朝まだき學校に通ふ前において膝間何某かもとに踊をならはせその後は一日の課程即ち五時間の授業終りて歸り來るや早そこそこに常盤津何文字が許に追ひやり、玆に暫らくの稽古濟んで歸るや其夜しも亦長唄の家にゆかしむ、まだ二つ葉のかよわき躰軀、斯く激しきことに堪えめや、然かも斯くの如して敎えたるもの後ちに於ては何の功ある、抑も笑ふべきのことゝいふべし中にも學校は休ましても稽古は休ましませんなどいふに到りていよ／＼笑ふべき極といふべし、さる母達江戸の町中に何千人かある。

（四）踊りのお浚らへ

夏分はあまりなし是れより追々凉風たてば各所にて踊のさらへといふこと行はる、これも亦母が娘を驕るの時にて頓がて全力を盡くすの時なり、讀んで字の如く踊りのさらへなすことならば左までにはあらねども實際は踊りのさらへにあらず畢竟は互々衣裳の競爭に其

贅澤をほこるは爭ふべからざるの事實にして、凡そこれ程に笑ふべきなし模様ある大振袖或は華美なる上着なんど唯々一日の舞臺に用ひて更らに永遠の用なきもの、いはゞ數時間をほめらるゝため何百といふ大資を捨つるこれを江戶氣質といはゞいふべし。

(五)おちで

踊のさらへにやゝ似通ひて又さらぬ事の一つあり、そは大寺院など法會といひ大會と號し目立たしき佛事行はる時、稚兒といふものに出だすことあり。幾分か迷信によりて實際其の無事を祈るとか又は息災を念ずるなど、內心誠に思ひ立ちて所謂難有く心得てなすもありとはいへ、其過半實に十中の八九までは等しく其兒の愛らしさとか或は其こしらへの立派さとか恐にもつかぬことを競ふて、母同士の相互ほこりあふなり。末世の佛法斯る小さき事によりても世に翫弄のなかだちとなる、抑も嘆ずべきかなたとへば池上の御會式など實に此競爭の盛時にして其處此處の母親連中おのがじし我が子をつれて派手競に集まり來たるもの、凡そ何百といふ數を知らず。これも改むべき習慣の一にこそ。



神のさかえ

(六)稽古の月謝と其外

所謂稽古屋の月謝なるもの先づ其通例を三十錢とす、外におさらへと稱して毎月一回其度に御届けと稱して、若干出だす如何に積りても大抵四十四五錢となる。それをも唯一軒のみにあらず或は二軒又は三軒、多きに到りては四五軒

にさへ通はしむもの中々少なき金にはあらず、然かも學校の授業料を此人にして高しと嘆こつ抑も何と許すべきにや。

(七)下品な流行

およそ我國の流行といふもの、其何事に限らず、何れも其標準を下流に取ること嘆かはしきとなるが、人は皆上品といひ或は高倘といふことよりも、寧ろ意氣といひ粹といひ、ひたすらに其下流的趣味を愛するよ樣々あるが中に、殊に女の風俗に多きは今更のことにはあらず、大道に相逢ふところあれは何屋の何某などいふ白拍子にはあらずやなど、能く〳〵糺し見れば、何ぞ計らん或堅氣なる商家の娘と驚かるゝことは屢〻ありし處たり。さて其いまだ幼なきものには殊とに此風盛んにして、恰かもお酌と見まがふがごと、萬づ凡べてを飾らせたるもの一〻にいはずとも人や知るらん。さる頃のことなりしとや、麹町區の或學校に然かも立派なる紳士の娘が頭をシャグマに結ふて來しあり、シャグマとはいとも賤しき結ひぶりにて娼妓の外はなすまじきものなりとて敎師なる人のそを咎めしに、父母のいたくも激してさる些少なることまでも學校の六ヶ敷干渉なるとは存じの外なりと嚴しく談じかけられて困まりしとやら、其學校長の直話なりき。こはその母が例の鼻元思案に斯くは無法なることをいひしとおもはる。他にも此類あり、各〻我が身を戒しむべき手本とはいふべきにこそ。

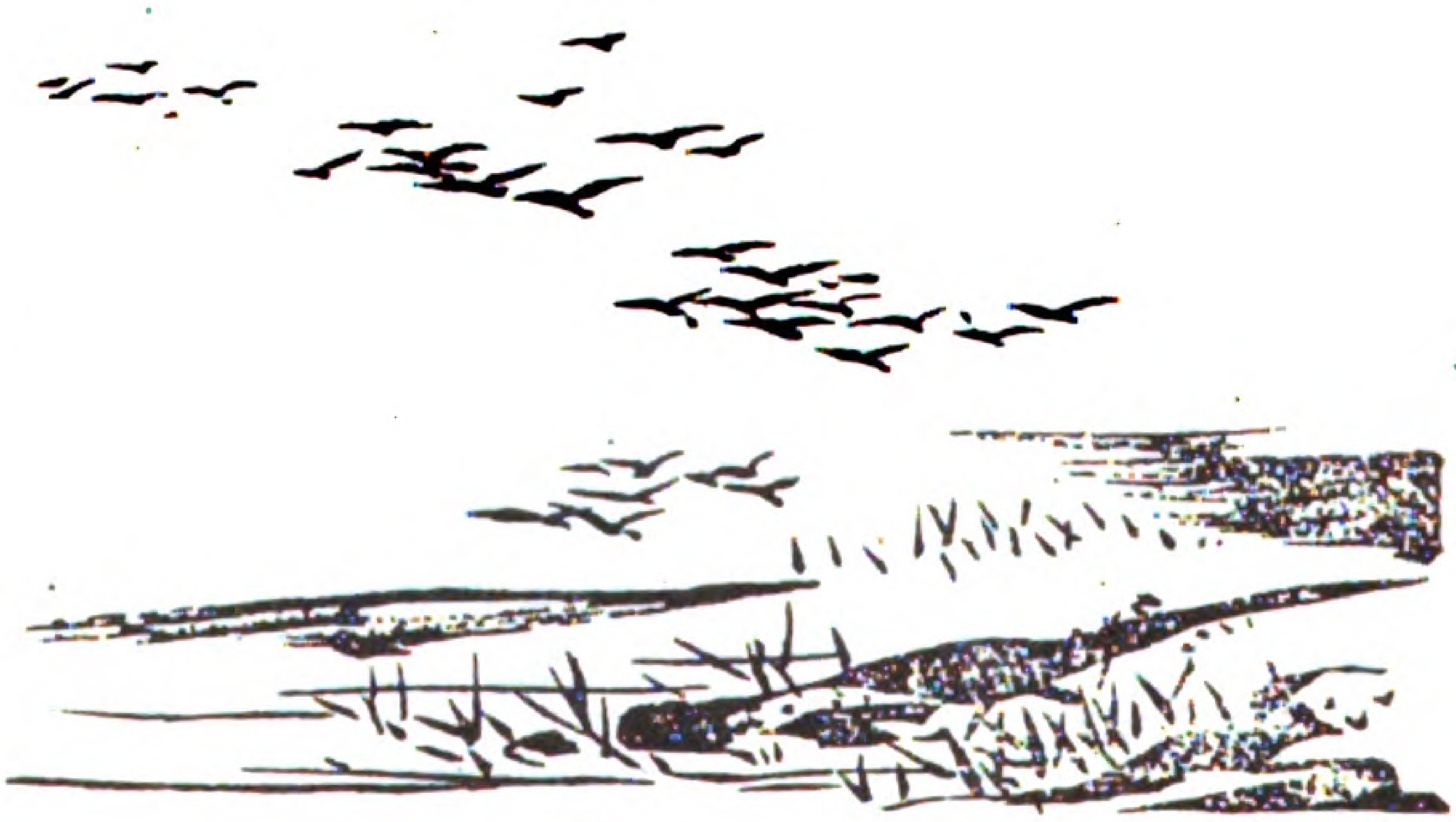
(八)長うたの諸曲

俗曲樣〻の中について其文句といひ其調といひ尤も高倘にして上品なるは實に長唄にまされるものなしそは長唄は大抵皆謠曲平語などより來れる多ければなりなどゝ人のいへども實際を調らべ見る時は決して然らず所謂其派なる作者どもが世の俗物の嗜好に媚びて種〻樣〻と附會せし末金玉の文を皆瓦と化し上品の分子の

残らず醜の醜とはなし果て遂ひに親子の同席などにて聞くに堪えざる迄になり了りたる往々にして何れも然り、さればこれより品下りたる他の諸々の曲において上品高尚の分子あらざる元より至當のことゝいふべし。

文學士柳澤よね子

廿五年前東京に生れ、九歳の時兩親に隨つて米國に到り、後十一年間パシフイツク大學に在りて講學に從事し、三年前カリホルニヤ大學に入學し、今回同大學を卒業してバチエロル、オフ、レタースの學位を授けられたり、本邦の女子にして米國の大學を卒業せるは孃を以て嚆矢とすといふ。成績優等にして英文の如きは英國文學者の筆としても天晴のものなり云々と桑港クロニクル紙上に記せり



淡雲微雨

製絲場工女の教誨

府下八王子町の萩原製絲場にては、設けたる規則によりて場内に教務の一課を置き、毎月二回本願寺へ依頼して教師の派遣を請ひ、本年一月より實施し居り、工女の出入ある時は、特別に教誨をあたへ、夜分は普通教育を施すとせるに漸次その効ありと、同場は工女五百人織物と製絲とを併せて業となし、工場主萩原彦七氏は實業勵精の廉を以て綠綬褒章を受けし人なりと、工女の教誨は今日に切要なるとはいふまでもなく、各工場が此萩原工場の如くならむと最も望ましき

となり。

夏期兒童の心得

夏期休暇中兒童の心得として大阪市東區高等小學校にて各父兄へ頒布せる心得書は、家庭に於て注意し兒童衞生法ともいふべきものなれば左に拔抄す。

夏期休暇兒童心得

一風呂には、毎日入り、身躰は、毎朝水にてぬぐへ〇一朝は、はやく起き、夜は、早くねよ。一毎朝、涼しきうちは、諸學科の、復習をせよ〇一運動遊戲は、外にて行ひ、炎天ならば、日かげをえらべ〇一食事の、前後は、靜にして、烈しき手あらき、ことをすな。一激しき運動した後は、汗ばみても水をあびるな、又冷たき、風をもよけよ〇一夜置に、あたらぬやうにせよ、又、夜ふかしなどして、物を食うな〇一芝居寄席小屋、人ごみの、塲所には、決して立ちよるな〇一不潔塲所や、流行病の、おの塲所へ、たちよらぬやう、心せよ〇一學校規定の、外にては、子供連にて、水泳すな〇一男は髮を短くつみ、女は時々、きれいに洗ひ、髮油を、多く用ふるな〇一手足の爪は、時々きり、爪の間に、垢をためるな〇一いくら暑くとも、裸體になるな。一ねる時は、寢衣をきかへ、腹を一帛布にて、輕くまけ、さなき時には腹掛をせよ〇一汗拭は、度々きれいに、よくすゝげ〇一こなれのあしき蝦や蛸、烏賊にするめに、貝の類、油揚物、酢漬、いつた豆、これ等は多く、食するな〇一渇くとき、湯茶は程よく、飲むもよし、かならず、生水は、用ふるな〇一食物は、よく煑たものを、かんでくへ〇一あしき臭のあるものや、良否しれぬものを、食うな。一大道又は店頭に、久しく露列する、食物は、妄に買うて、食するな〇一未熟桃柿、瓜西瓜、これらは決して、食するな、よしや熟たる、物さても、皮さ核さを、よく除け〇一食物を、病人ある家で、貰っても、濫にこれを、口にすな。



すがた

あまりに制止のとのみ多くして兒童の活動を戸内にひきこまする傾はあれど、夏はかくてあらむと寧ろ安全

の法なるべし、家庭の主婦はこを斟酌して愛子愛嬢の病にかゝらざらむやうしたまへかし。

◎女子演説會

日本婦德會などいひて同志社女子部卒業生金鵬女史梅花女學校助教太田國子其他の女子各所に公會演説をなし、血涙を飮んで男子に訴ふとか、骨髓に徹したる遺恨とかいふ題をかゝげて甚だ眞面目ならぬ振舞をなす。一方には濟生學舍女生の檄文を草して女權擴張のために演説會を開かむとして贊成を求むるあり、文中、女性のため二千萬人の姉妹のため犧牲となりて大々的公開演説を開き云々同感の女性諸君來て我等の壯擧を贊成せよ云々とあるなど、如何にも言語同斷のと、輕薄お轉婆の氣風を發れず、女子敎育を害するものはかゝる女子の罪多し、彼の女大學保守的の氣風漸く眞正の女子敎育に化せんとするの折柄、かゝる女子の振舞はよろしく排斥すべし、時事新報がおのぶ源次郎につき新婦



風情



雖を說き男女區別を徹せよと說けるなどは元よりかゝる際に女權擴張を唱へしにはあらず、濟度し難きは生もの知りの人々にこそ。世の父兄たらむ人、かゝる現象を見て女子教育を輕むずるなからむことを。

◎老媼懇親會　秋田にて八十歲以上の老媼十一名、懇親會を催し、老年の事業につきて相談せりといふ、世に美しきことなり。

◎牛乳驗液器メートル　大阪市東區南本町一丁目生湍商店山口源兵衛方にて製造發賣する牛乳メートルは牛乳若くはコンデンスミルクの濃淡の度及び混合物の有無等を一見して判明し得る便利なる器械なるが年來の經驗より製造法も進步し外國品にまさるに至れりといふ硝子製の圓筒附きて壹組四十五錢郵稅八錢度數分量小兒大人の服量使用法等の說明書あり牛乳を飲むには必要の器なり

社告

寄書募集

一　地方風俗習慣上につきての所見若しくは所感
一　其地方に於ける時々の見聞錄、
一　家庭に關する自他の經驗若くは出來事の見聞、
一　兒童遊戲の種類、
一　家庭日記の類、
一　童謠俚歌

諸家の寄書多く堆積せり編輯上の都合に依り次號に網羅すべし

華族女學校學監下田歌子先生著

家庭文庫

全拾貳册和裝　正價（隔月壹回發行）　●壹册金參拾五錢●參册前金壹圓●六册金壹圓九拾錢●郵稅一册六錢

第六編 母親の心得

●全壹册和裝大和綴菊判頗美本　●正價金參拾五錢　郵稅六錢

男女の子供が、身體强健となり、智德完備の人となるもならざるも、此の家庭教養、撫育の如何に在り。之を大にしては、一國の元氣を消長し、之を小にしては、一家の光榮を左右するものなり。されば此篇には、其母たるべき人の注意、衛生の點より、幼兒が漸々發育して、小學に在る程の事、及び其が翫具遊戲の有益なるものをも、丁寧懇切に舉げ示さんとすなり。

家庭文庫全部目次

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（中付の一）

従一位勳一等久我建通公題辭

宮内省大膳職庖丁師範
舊幕府諸藩料理師範 石井治兵衛君著

日本料理法大全

製本既成（著金即日送本仕候）

全壹册總クロース金字入（洋装美本）紙數千六百貳拾頁

豫約 正價金貳圓五拾錢 ● 豫約價金壹圓五拾錢

豫約期限 申込八月三十日迄

● 小包郵便料○十里迄……金七錢○百里迄……金拾貳錢○百里外……金廿四錢

● 豫約御申込は前金を要す ● 御送金：郵便爲替は『東京郵便局』渡にて御振込の事

宴遊饗膳の料理より日常惣菜の調味に至る迄、細大洩らさず網羅大成したるものは、本書**日本料理法大全**なり。全編紙數千六百廿頁、編を十五に分ち、仔細に庖丁の鹽梅を示し**何人にも獨習し得らるゝ**様、平易簡明の文を以て説明し盡しあれば、奥方は之を花の宴、月の筵に伴ひ、細君は日夕の臺所にも備へ置かば、獨り割烹調味の要あるに止まらずして、或は家庭上に一の娯樂を増すにたらんか。

豫約發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

家庭雜誌第百拾九號附錄

（明治三十一年八月十五日發行）

文藝



葉越の月

二十三階堂

其一

元和年中の頃なりき、安房上總兩國の大守里見安房の守が家臣に進藤伊織といふあり、千二百石の地行にて、代々の番頭を勤めて大守の御覺へいとも芽出度し、伊織は其の頃二十二歳先年父歿りて家督を嗣ぎ主君大事と仕へけるが、生得美男なるが上、器量勝れて家中人々の譽れ者となりける、妻は同役山名主計とて是れも八百石を取る人の娘にて

名をかねと呼び家中第一の美女にて歌道風雅の心かけ淺からず才藝並び備へて世に好もしき女、是の夫にして此の婦あり實に鸞鳳の相交はりと人々讃美へける。

女子の身に起る禍災の多くは其の身の淫心なるにあり、然らずんば他の邪なる情事を除くるの道なきに由るとぞ、伊織夫婦は鳳鸞の契りいと濃やかにして同穴の交り知人の羨む所となり一家の和氣圓滿なるが上に又一つの寶を儲け名を金二郎と喚び夫婦が掌の珠と鍾愛涯りなかりき。然るに或日の事同じ家中より火を失し隣家なる矢部半太夫なる者の家を燒き盡しぬ、半太夫は一刀流の達人にて劍術の師範を爲す者、一家中の壯少過半は此の人の門人にして頗る名聲あるのみならず、伊織とは日頃格別の昵懇にて通家のよしみあるものから、此の度の類燒を一しほ氣の毒におもひ、長屋の出來するまでは見苦しけれども拙者宅へ御越しあるべしと鄭寧に申し遣はせしに、半太夫も其の好意を謝し、即刻近藤の家借る事となり表座敷の二階を居間となして暫らくの不由自を忍びぬ。

半太夫は今年二十六歳一と廉の男なれどもいまだ世に定まれる妻はなし、二百石取にて兩親共に數年前歿りて後は下男に薪水を採らせ世を獨り棲の身の上なれば、類燒の後は一倍不自由を觀じぬ、主人伊織は日毎御殿へ出仕して暇なけれど退出の後は必らず二階を訪づれ、四方山の咄をなして客の無聊を慰めければ、妻のおかねもそれに伴れ添ふて萬事に意を注、朝夕侍婢に命じて含嗽水を把らせ寢床の上下より食事の給仕など親切を

盡しけるが、半太夫も始めの程は兎角遠慮勝にて蔭日向なく身の廻りにこゝろ附けらるゝ事一しほ迷惑におもひ、其の都度辭退しけるをおかねは何時もやさしく取做し、猶々の御災難にて嘸かし御不自由に思召さるべし、伊織事は貴所樣の御丹誠にて武士の嗜み第一の御指南に預り、数ならぬ妾風情も忝なく存じ責ては御恩報の爲めとおもひ候へば御心盡の程は御無用に候ぞと、其の口上といひ立振舞、標緻は家中第一と噂のあるも眞實無理ならぬ面影、倩々と見惚て居たる半太夫いつしか迷ひ心になり艷やかなる姿を見ては胸どきめき、次第にするほどに其の後は、唯面を仰ぎ見るさい日光に射らるゝばかり眩く、甲斐なく後ろ姿を目送りて茫然たるばかりなり。

其二

他人の妻に戀慕しかくるは眞劍命を賭けての仕事と覺悟せで叶ふまじ、苟めなるこゝろを動かして其の爲め生命はおろか身の榮辱までもなきものになすことの癡氣たる是れや聰明なる半太夫の心附かぬにはあらねど猶且つ脆きは人の情なり、一と度び迷ひの雲の胸の鏡にかゝりし上からは身の榮辱も何のその、一度の情け五十年の生命にかへて倩々惜からずとおもへば一日も早く心のたけを知らせたしと矢竹心になりて急々く一封を認め、それを内懷ろに納め、よき機會もあらばとおもひつゝ日を暮らしける頃しも夏は三伏の此の日は朝より蒸暑かりしが午過ぐる頃より空合變り俄かに夕立雨劇しく天地の破るゝ

ばかり雷鳴して家も震ふ程なりしが、下より小侍上り來りて扨ても凄まじき大荒れと相成候、二階は一しほ響も強く候はん、まだ主人も歸宅候はねど下には女子ながらも大勢をり候、御紛れにも相成候はん程に心置なく奥座敷へ御通下さるべしと奥樣よりの言傳に候と申しける、半太夫も好むところ直樣袴を着して奥の間へ通り近頃失禮ながらあまりの大鳴ゆゑ仰せに任せて罷り通り候と一禮述べて座に就けば、おかねは左程遠慮のあるべき人ともおもはねば側近く座りて、侍婢に吩附け茶菓盆を運ばせ、干菓子など取出して何くれとなくもてなしけるを、半太夫は好き機會とおもひ、豫て用意の一封を取り出して密とおかねが手筐の中へ擲げ込みつ、素知らぬ顏にて空嘯ぶき居たりけるを、相手はちらりと見て其の塲は粗匆くも物言ひ兼ね、是れもまた知らぬ顏にてありけるが、半太夫今は度胸も据りしと見て庭の風景の佳き所を讃め、蕣花の美しきを眺めて賞翫せば、おかねもさあらぬ體にて妾が身は蕣花を殊の外好み候ゆゑ、毎朝早起して莟みの內より眺め候を樂には致し候など他愛なき事共咄しに紛らしける其の內雷も鳴り歇ければ半太夫も匆々に辭義して座を退り立ちける。

其三

艶書を贈りし半太夫の胸の中は元よりの事ながら贈られし女の愕ろきは如何なりけん、斯くと知りては其の書に手を觸るゝさへ恐ろしきものゝ如くにおもはれ、現〳〵と認め

られし艶書の文字を見るからにさながら脳天へ冷水浴かけられたらんやうに一時は何の分別もなく唯途方に暮れてゐたりけるが、扨て心を落着けて見るに相手の人物も人物なり、又日頃此の方との間柄といひ、如何にしても這は容易ならぬ事共なり、されど膠なく恥掻かさんは本意ならねど、今此の塲に言ふべき程の事言はでは所詮後日の障りを免がれ難しとおもふものから、决然分別して一書を認め、贈られし艶書を其儘、一ッになし上を緊しく封じていつもの通り下婢が蚊幮吊に上りし透を窺ひ、密かに寝床の上へ擲げ置きける、半太夫待ち兼ねて披き見る其の文に曰く、

先刻の御一封何事共不存文讀むすべも知ざる妾外ならぬ御事と存じ候、縷々伊織申上候通り御親父半右衛門様は影ながら我等親同然就ては御前様も御兄同然と心得大切に存じ候處、唯今存じの外成る思召、御前様には大切なる御身の上、數ならぬ妾躰に御心被懸候御志淺からず候へ共烏許ヶ間敷事ながら貞女兩夫にまみえずとさい申候へば已來はふつ／＼思召切り被下相かわらず御こん意下され候やう偏に／＼願上候目出度かしく

とあり、半太夫讀み下して、別段後悔の心持にもあらざりしが其内長屋の假普請も成就なし半太夫は軈て其れへ引移りしかば、お兼も二度無躰の事はあるまじと一まづ安堵のおもひをなしける。

其四

半太夫が假の長屋へ引移りて間もなく或る日の事なり、おかね例の通り、朝顔を詠めんとて早起して庭へ出づれば、蕣花の繁みの中に長さ五寸ばかりの竹の頭突き出でたり、何氣なく取りあげ見るに中程に接手ありて引あけ見るに中より一封の書翰ぞ顯はれたり。擬ふ方なき半太夫の手蹟なり、またしても是非なき仕業かなとおもひながらも良人に見つけられては一大事、と密と懷中へ押こめ、素知らぬ顏にてありけるも心は容易落着かず、元より此儘受取るべきにあらねど去とて下女端女に持たせ遣はしては露顯の基と深く恐るゝものから其儘一日無沙汰となし置きけるに翌る朝に至り又庭前を見れば昨日と同じ竹筒ありて一封の艶書ぞ挾まりたり、またしても詮なき事とおもひ密つと懷中して其儘に置きければ三日目の朝に至り又もや同じ竹筒を見る事おかねの身となりては心苦しき限りなれ、されどまだしも他人の見附ざりしだけを幸いの事として密かに押隱さんとして取りあぐれば此の度は封なくして手に觸るゝと其儘さら〳〵と繙けかゝりぬ、恐ろしき物の見たき心ろになりてそれとなく讀み下せば――尋常ならぬ恨言なり、幾度文を差しあげても御返事なきは何故ぞ、人頼みは露顯と思召しての事ながら去りとは曲がなし、一度位は何とか御返書のありて然るべき筈に候はずやとてそれより恨みの數々骨にも入るほどの文句なり返しを見れば御雪隱の脇に櫺子窓の有候へば此所へ御返事御認、

め御越せ置き被下候へば夜の五ッ時請取に参り候間平に御返事頼み入り候とありける。斯く心の迷ひ深くなりし上からは最早返事をするにも及ばぬ事と三度の玉章を一緒に纏めて別段添書もせず其儘櫺子窓の上に置き戀の奴の取り來るに任せて知らず顔になしけるが、戀慕の執念も斯くなりては恐ろしきものなり、其の翌る朝見れば同じ場所に一通の裸文の蕣花の葉がくれになるもうたてし餘義なく取つて披き見れば暮れ／＼御返事待ち入候處、一筆の御かへしもなく恨めしく存じ候、圖らず思ひ入り候此の方片時も忘るゝ暇なくおもひは遣る瀬なく候、伊織どのへの御心中は御尤と申しながら斯く申す上からは譬へ此の身は何となるとも御異言には隨ひまじくと是非なく覺悟極め候、よしや火に入り、水に入るとても一度の御情けは金輪奈落願はしく候、と手短かに心の底を打ち出したる文句の凄味も今更なり、おかねは篤と熟覽して眼を塞ぎ霎時無言にありけるが扨こそいよ／＼大事とは成ッたり、最早妾が身も覺悟せでやあるべきと雄々しく決心なしたりける。

其五

半太夫が一命擲うちての戀の念力、火水の中へ飛び入りても苦しからずとの一言は宛ながら鐵槌もて腦天を打ち砕かれたらん如く心挾き女は一隨に家の禍を覺悟して妾身の斯くてあらん限りは良人の身に妖祅の降りかゝらんは必定、如かず身を亡きものにして家

の安全を謀らんにはと、いにしへの貞烈も恥なんばかり雄々しく决心なしけるが、心に懸る愛子の身の上、玆年三歳、憎しといふほどの可愛盛り流石女の振棄兼ねしが聊かなる恩愛にほだされて大事を損じなば悔て歸らぬ過ちを見るべしと心を鬼になして其の夜良人に向ひさらぬ躰にて妾事も父上樣の御廟へ久しく御無沙汰に相成居り候まゝ明日は保養かた〳〵觀音樣への參詣を兼ねて參り度候とそれとなく訣別を告げ、翌日伊織は常の如く御殿へ出仕しける其の跡にて仕度とゝのへ、官兵衛とて律義なる用人ありけるを喚び萬端留主中の事共申し置き厮下に乘駕籠を用意させ侍婢お秀お富の兩人と若黨の藤藏を先に立て外に仲間二人引つれて淺草なる菩提所誓願寺へと急ぎける、菩提寺にては輕からぬ檀家の事なり、近藤樣の御内儀の御墓參とて住持も方丈を罷り立ちて玄關まで出迎ひ書院に請じて茶菓など差め、いと鄭重に待遇けるが、扨て今日は風さいありて殊の外涼しければ其方達は久々にて保養にもなるべし觀音樣へも參詣なしいろ〳〵見物もして參るべしと腰元中間共を出し遣り、次に若黨を呼び、其の方御苦勞には候へ共、急用の出來候程に一走り屋敷へ歸り呉れよ、これは昨日殿樣より下し置かれたる和歌の探題なり今日午の刻までに詠みて奉るべきを、取急ぎたる儘に忘れたりとて筆採り敢えずさら〳〵と認め堅く封じて渡しければ藤藏平に畏りて懐中になし屋敷をさして一散に歸りける、時分はよしとおかねは雪隱の廊下を傳ひて、裏手へ廻り豫ねて用意の短刀を懐ろ

より取り出し墓場を繞らす垣根の繩を截りほどきぬ。

其六

早朝御殿へ出仕したる伊織は此の日何故にや胸打さわぐ事のありて心地常ならず、氣の進まぬ儘に匆々暇を取りて午過ぐる頃我が家へ歸り物の本など取り出して氣を紛らしゐるうち若黨の歸り來たりて慌忙しく物申すに何事ぞと不審して問へば、奥樣より大切の御一封爾々の次第と申すに、伊織いよ〳〵訝かしく斯る和歌の探題を何時殿樣より下し置かれしにや更に合點の參らぬ事共かなと思ひ乍ら念の爲め其旨御上へ達しければ左樣なる事曾つてなしとの仰せなり扨ては彼れ亂心などせしにや愈々以て不審千萬なり、今日の墓參に仔細ぞあらんと用人を喚びて今朝程の模樣を訊ねければ、別段御變らせの御容子は見受候はざりしが前夜夢見の常ならず惡かりし程に旦那樣の御身の上に氣を附け呉れよと重ね〳〵申し殘して御立なされ候又しても御女中方の癖とおもへば別段氣にもとめ申さずといふ伊織一考して仔細あるべし急ぎ寺まで迎ひにまいるべし途中心にかゝる事どもあれば大義ながら其方も同道せよと用人官兵衛を促すところへ菩提所よりの急使奥方の御紛失なしたまひて行方知れず候程に急ぎ御用人參らるべしとあり、素破こそと早速に官兵衛驅けつけ其の邊りの人夫を傭ひ各手を分ちて其の夜九ツ時まで懸り四宿の木戸まで尋ね廻りたれども何處へ落ち延びけん更らに其の手懸だにあらざりける。

其七

若黨の藤蔵は其の日のお伴を仰せられし事とて萬一の事あらばおのれの落度とおもふものから是非とも捜し出さでは置まじと其の日品川の方へ見込をつけしが一と筋道のこと故道々掛茶屋へ立ち寄り往來を行く馬士、駕籠舁、上り下りの人足等會ふ人毎に尋ねつゝ一夜を明して翌日川崎の渡し場まで來り、其所にて段々訊ねし所昨日八つ時とも覺しき頃下樣の者とも見えぬ十八九の美しき女中が渡し場へ懸り、急ぎの用事にて神奈川の宿まで行きたし、渡し錢のなき故何卒是れにて渡したまへとて銀の簪を渡されし故、人々不審して、御持合せなくば宜しく候僅かの賃錢に斯る結構なる品物は受取難しと斷りたれば、最早姿が身に不要な物金銀とても露惜しからずとの事故皆々顏見合せて扨ても合點の行かぬ事とて其由申して品物は問屋へ預け置きましたといふ、扨ては其の女中に紛れなし、姿形は斯く〳〵にて頬の下膨れした眼元に何共愛嬌のある女、さう〳〵いまだにあの美しさが眼に殘つたと仇言らしく云ひけるを半分聞いて扨はいよ〳〵奧方に紛れなしと早速問屋へ案内を賴み其の簪を撿じ見るに擬ふ方なき影蔦の定紋あり然らば其の人は何所へ向けて立ちしやと訊ねければ昨日店での話しに鎌倉まで行くとの事なりしが大方草臥の容子にて駕籠に乘りたしとの事なりしも人足賃四百文なくては繼立がたく、渡し錢の持合せもなき御身ゆえ所詮相談にはなるまひとの事なりしが、人足賃にはこの

櫛を遣はすべしとて又もや大枚の所持品を出されたり、跡にて其の櫛を吟味しけるに過は全く瑇瑁とやらにて安價に踏みても二三兩が物は確かなり、僅か四百文の所へ斯く大造なる品を受取りては後日の障りにも成らんかと大切に仕舞置き候彼の地へ參りたる人足も往復十八里の所なれば軈て歸りまうさん程に暫時御待あるべしと言はれてさらばと問屋場へ腰うち掛け莨など呑み居る所へ人足歸り來りしかば仔細に尋ね、正覺院と申す尼寺なりし事判然したれば其所へ駈けつけ律義ものゝ委細構はず玄關より大聲にて喚び立て進藤伊織の家來安田藤藏と申す者に候、昨夜當院へ御越なされ候駈込の女中に一と眼御會いたし度候と申しけるを、內より達摩に似たる尼の駈け出で何者の粗忽ぞ、此所は男禁制の場所なるを心得ざるかと眼を瞪らして一喝したる權幕に藤藏犇と荒膽を挫かれぬ。

其八

進藤家に於ては奥方逃亡して行衛知れずとの事に一時は上を下への大混雜家來小厮打ち寄りて內々詮儀をなしけるが誓願寺の裏らの垣根を切り拔けたる跡を見れば何樣欠落に紛れなし、されど我等が御新造に限り色戀の上にさる心得違ひのあるべき筈はなし是れには何か深き仔細のなくては叶ふまじ、とおもへど日頃愼み深き性質とて下人の知るべき譯けもなし、唯亂心とおもはゝそれまでなりと伊織も今更らに合點は行かず舅主計諸

共に思案に暮れしが兎も角もと送り越したる彼の一封を披きて歌の意を吟味するに

千代までと賑めし花も吹けばなほ

名殘はつきじ夏の夜の月

とあり、是は盛りの花を賑むるうちにも風吹けば散るべきものと無常の心を顯して更に夜の月にて結びたるはいよ〳〵人生の墓なき所を言ひ顯したるものなりさては世上によくある例し無常を觀じて俗世を遁がるゝ心にやと斯る所へ藤藏喘ぎ〳〵て歸り來り搜索の顚末を委しく語りけるに、いよ〳〵それに紛れなしと一同一まづ安堵はせしものゝ夫婦の中に子さいあるものを唯譯もなく遁世も近頃不滯の至り一言の挨拶もなさで山院に駈け込みし事更〳〵其の意を得ざるなりとそれより官兵衛鎌倉へ馳せ向ひ腕づくにても迎へまいらすべしと必死となりて爭ひたれど法門の事は理屈にて押し難く三日三晩玄關に詰め蒐け樣々情實にからみて申しけれども其の意を達する事の叶はず空しく歸りぬ。

其九

去程におかねは鎌倉の尼寺へ駈け込み、住持正覺院妙蓮比丘の弟子となりしが始めは尼寺の法として七日の間は逗手の容子を見て容易に剃髮を許さゝりしが仔細を話せば若き女に珍らしき貞烈の志しと住持も感じ八日目にいよ〳〵黒髮を御して淨蓮尼と改め縞絹の小袖を墨染の法衣に改め水晶の珠數爪ぐりて行ひすましぬ、常に不動を信心せしより

佛道に入りても並々の者とは違ひ經を覺ゆるにも苦しまず、法も修するに難からず淨蓮今は心易く朝夕を暮らし、屋敷の事も、我が身さいあらざれば伊織の身の上に氣遣はなし、よしや半太夫の知るとても此の所へ來て尼となりしを知りなばいよ〳〵戀も覺めぬべし、金二郎が行末心元なけれどまだ父母のお在しければ成人に疑ひなし、此の上伊織どの再縁を求めて安堵なされかし、我が願ひはこれにて足れりとてそゞろ佛恩の高きに感謝をぞなしける。

其十

劍法の師範家とて評判一家中に鳴り渡り俊才の聞へ高かりし矢部半太夫も一旦の迷ひに心の鏡曇り、憐れ色情の奴となりて朝夕遑々然として物足らぬ心地しつ、胸も塞がり氣分も勝れず問もなく女の家出したるを聽きて更らに心を苦しめそれよりは一しほ氣の結ぼれて病の床に臥しゐたるが近習役にて日頃昵懇せる山田甚五郎といへるが、此の身も落馬して撲身を痛み、暫時湯治にと勸むるゝ儘に半太夫も同意なし、兩人相携へて伊豆の熱海へ赴きける近邊の人々共是れも遊び半分湯治に來り互に出會ひ珍らしき浮世話しの半ばに甚五郎不圖伊織が妻の事を言ひ出して近頃合點の行かぬ事共なりといへば側に居合せたる隱居躰の男受取りて御話しの容子にては私し少し心當りも候、それは先月の末つ方年の頃十八九の美しき女中が伴をも連れず唯一人私共の憇み居たる問屋場へ懸り

て鎌倉まで駕籠を繼立てとの事なりしが四百文が駕籠の代に惜氣もなく瑇瑁の櫛を渡して立去りたればあまり不審と香具屋共に見せけるに七匁より五兩まで直段付けて候、世には珍らしき事する女もあるものよと何心なく語るを、半太夫聞耳を立て、扨て其の女中は如何に相成候やと糺けば鎌倉の尼寺へ駈け込みたりとの噂にて候といふ、傍なる人の語るに總別尼寺へは夫の方より離縁されし時入る習ひなれども、道を忍んで駈け込むは夫婦の縁を我れより切りて慾ふ男に添はすが爲めなり、さらば其の女中も一時は尼となりしものゝ程經て時分を見合はせ歸俗する心にやあらんと推量していふを元來心盛りし半太夫の是れを聞くや否おかねが尼となりしは一圖に己れへの心中を立てんが爲めなるべしとおもふものから湯治も匆々になし甚五郎へは善き程に言ひ置き翌る日直ちに仕度を爲し江戸へ歸ッて後ちの障りの根を絕やしてこそと凄くも心を決して暗に伊織を狙ひ、一刀に打ち果して其の夜の中に早駕籠を繼立て鎌倉さして落ち退きたり。

其十一

始めより毒心を包藏したる半太夫にはあらねど事の行がゝりは人の心を鬼ならしめぬ、情誼淺からぬ朋友の一命を打ち果し、おのれは二百石の家祿を土芥と擲ちて其の夜鎌倉へ立ち退きたる半太夫は兼ねて聞きたる雪の下の尼寺正覺院の朱門の前を二三度行きつ復りつ軈て玄關へ訪ひ姓名を名乘りて淨蓮尼へ面會を求めければ軈て六十餘りの老尼亦

晶の珠數爪ぐりつゝ出て來りぬ、いまだ一應の挨拶もなきに屹度半太夫の顔を睨みつけ泰然としていひけるは扨〳〵其許は侍にあるまじき男なり、主ある女に不義を申しかけ、可惜貞女を世捨人の數に入れたり、彼の人の佛道に入りしも一つは家の障りを除かん爲め又一つには萬更他人にもなき其の許の心の迷ひを晴させんとの遠き慮りぞかし、それをも悟らで尼となりたるものを慕ひ來るとは何たる腰拔ぞや、淺猿しとも、穢らはしとも譬へやうなき人非人物言ひ換はすも心の穢れ早々立退いて少しは身の恥をも覺悟せられよと尋常に言ひこむれば、半太夫今更言葉に詰り、何と言ひ張らん術もなかりしが一方ならず戀にあこがれ其の上二百石の知行も棄て、家屋敷も打遣りて來る上からは破れかぶれ、腕づくにても奪ひ取るべし多寡の知れたる尼寺の有造無造等と力みかへりて逆まんとすれど剛毅の尼に手を付け難く無念を呑みて其儘空しく引き取りしが疵持足の追手を危ぶみ東海道より西國さして落ち伸びけり。

其十二

爰には奥方の遁走あり、今又御主人の横死、一家の不運名狀すべからず、慘むに詞なく悔むに辭なし、悲慘至極の境界も家に殘れる人のなければまのあたり哀みて親の涙を濺さんものは御岳父山名主計のあるばかり一子金二郎はまだ東西を辨へぬ頑是なきもの實に申すも愚かしき事ながら斯る時にこそ神ぞ哀んで傷らんほどの人こそ欲しけれ、又斯

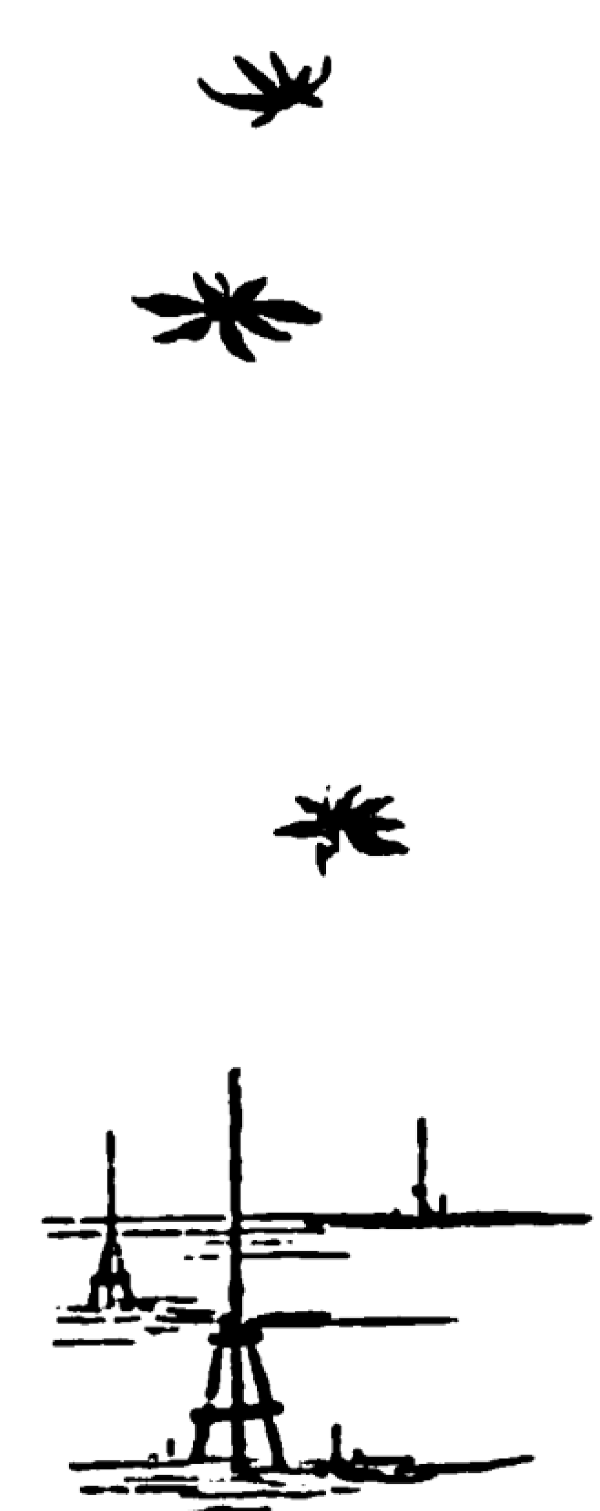
かゝる人のありてこそ死したる人も冥すべきなれ現在奥方は有りながら今は世を捨てゝ俗世の涙を濺す人にあらず、無念とも心外とも扨ては如何なる因果ぞと奥牙嚙みしめ熱鐵の悲涙を濺ぐものは家の忠臣官兵衛なり、讐敵は矢部半太夫に紛れなし、極悪非道の犬畜生、おのれ其の儘置くべきや、よしや汝に隱形の業ありて日本三界落ち伸びるとも草を別けても搜さで置くべき譬へ汝に飛鳥の術もあれ我等雷神となッて汝が頭を打ち碎かでや置くべきぞ、不倶戴天の主の仇、覺悟をせよと宛ながら其の人の眼前にあるが如く、悲憤を呑んでおもひ立ち、家の舅父山名主計へ一念の誠を語り、幼主金二郎を小腋に抱へへ心は同じ義膽の藤藏と三人相拉へてまづ鎌倉へ行き淨蓮の尼に面し事の顛末を委細に語り、縱しや佛門に身を寄せたまふとも現在良人の横死を見て心を塵外になしたまふは佛の道に候はじ、いざ立ちたまへ、我等に同道して倶に敵を討たせたまへ、猶豫ひたまふは我等の志を蔑したまふなりと斯くて其の塲に淨蓮尼を還俗させ同勢四人讐を狙ふて東海道を下りけり。

(完)



鹿狩

國木田獨歩



「鹿狩に連れて行かうか」と中根の叔父が突然に言つたので僕は狼狽た。「面白いぞ、連れて行かうか」、人の善い叔父はにこ〳〵しながら勸めた。

「だッて僕は鐵砲が無いもの」。

「あは……馬鹿を言つてる。お前に鐵砲が打てるものか、たゞ見物に行くのだ」。

僕は此時やつと十二であつた。叔父が笑ふのも道理で、鹿狩どころか雀一ツ自分で打つことは出來ない、しかし鹿狩の面白い事は幾度も聞てゐるから、僕はお伴をすることにした。

十二月の三日の夜、同行のものは中根の家に集ることになつてゐた故僕も叔父の家に出かけた、母上は危險からうと止めにかゝつたが、父上が「勇壯活潑の氣を養ふためだから行けと仰つた。

中根へ行つて見ると最早人が餘程集つて居た。見物人は僕一人、少年も僕一人、あとは三十から上の人ばかりで十人計り皆な僕の故郷では上流の人たちであつた。第一中根の叔父が銀行の頭取、其外に判事さんも居た、郡長さんもゐた、狹い土地であるから兼ねて此等の人々の交際は親密である丈け、今人々の談話を聞くと隨分粗暴であつた。

玄關の六疊の間に洋燈が一つ釣してあつて、火桶が三つ四つ出して有る、其周圍に二人三人づゝ寄つてゐて笑ふやら罵るやら、煙草の煙がぼうッと立罩てゐた。

今井の叔父さんが皆なの中でも一番聲が大きい、一番元氣がある、一番面白さうである、一番肥滿つてゐる。一番年を取つてゐる、僕に一番氣に入つてゐた。

同勢十一人、夜の十時頃町を出發た。町から小一里も行くとかの字港に出る、そこから船でつの字崎の浦まで海上五里、夜のうちに乘つて、天明にさの字浦に着く、それから鹿狩を初めるといふのが手順であつた。

「丸で山賊のやうだ！」と今井の叔父さんが其太い聲で笑ひ乍ら怒鳴つた。成程、一同の樣子を見ると尋常でない。各々粗末な而も丈夫さうな洋服を着て、草鞋脚袢で、鐵砲を各手に持つて、色々な帽子を冠つて——どうしても山賊か一揆の夜討位にしか見えなかつた。

しかし一通りの山賊でない、圖太い山賊で、かの字港まで十人が勝手次第に饒舌つて、隨分やかましかつた。僕は一人、仲間外れにされて默つて、皆なの後から皆なの饒舌るのを聞き乍ら歩いた。

大概は獵の話であつた。そして重に手柄話か失敗話であつた。そして矢張、今井の叔父さんが一番面白いことを話して皆んなを笑はした。皆んなが笑はない時には自分一人で大聲で笑つた。

かの字港に着くと、船頭が最早用意をして待つてゐた。寂しい小さな港の小さな波止場の内から船を出すと直ぐ帆を張つた。風の具合が宜いので船は少し左舷に傾ぎながら心持よく馳つた。

冬の寒い夜の暗い晩で、大空の星の數も讀まるゝ計りに鮮かに、舳で水を切てゆく先は波暗く島黑く、僕はこの晩のことを忘れることが出來ない。

船のなかでは酒が初まつた。そして談話は同じく獵の事で、自分は面白ろいと思つて聞て居たが何時しか寢て了つた。それは穩やかな罪のない眠で、夢とも現ともなく、舷側を叩く水の音の、その柔かな私語くやうな節々はコロ〳〵コロと笑ふやうなのを直ぐ耳の下の板一枚を隔てゝ聞く其心地よさ。時々眼を開けて見ると薄暗い舷燈の朧ろげな光の下に圓坐を組むで叔父さん達は愉快にやつて御座る。又た中には醉て饒舌りくたぶ

れて舷側にもたれ乍らうつら〳〵と眠てゐる者もある。相變らず元氣のいゝのが今井の叔父さんで、

「君の鐵砲なら一つで外れたら直ぐ後の一つで打つことが出來るが僕のはさう行かないから困る、なァに、中るやつなら一發で中るからなァ」と言つて「あは‥‥‥‥」と笑つた。判事の岡さんが何か言つて叔父さんを冷かしたやうであつたが僕は眠つて宜く聞き取れなかつた。

「德さん〳〵」と呼ぶ聲がしたと思ふと、太い手が僕の肩を搖つた。僕は直ぐ今井の叔父さんだなと思つた。「德さん、起きた〳〵、着いたぞ、さア起きた。」

「眠むいなア」、僕は實際眠かつた。しかし人々が上陸の用意をするやうだから、眼をこすり〳〵起きて見ると直ぐ僕の眼に付たのは鎌のやうな月であつた。

船は陸とも島とも分らない山の根近く來て帆を下ろしてゐた。陸の方では燈火一つ見えないで、磯をたゝく波の音がするばかり、暗く寂としてゐる。そして寒氣は刺すやうで、山の端の月の光が氷てゐるやうである。僕は何とも言へなく物凄さを感じた。

船が漸々磯に近くに連れて陸上の樣子が少しは知れて來た。此處は豫ねて聞てゐたさ‖の字浦で、つ‖の字崎の片隅であつた。小さな棧橋、棧橋とは言へないのが磯に出來てゐる。船を其に着けて吾等皆な上陸した。

たつた一軒の漁師の家がある、しかし一軒が普通の漁師の五軒ぶりもある家で吾等一祖が山賊風でどさ〳〵入つていくと兼ねて通知して有つたことゝ見え、六十ばかりの此家の主人らしい老人が挨拶に出た。

夜が明ける迄で此家で休息することにして、一同は其銃を却ろすなど、彼是れ放寛いで東の白むのを待た。其間僕は爐の邊に臥そべつてゐたが、人々のうちには此家の若いもの等が酌むで出す茶椀酒をぐび〳〵やつて居る者もあつた。シカシ今井の叔父さんは流石に倦憊れてか、太きな躰軀を僕の傍に横へてぐう〳〵眠つて了つた。爐の火が其膩ぎつた顔を赤く照らしてゐる。

戸外が漸々あかるくなつて來た。人々はそは〳〵し初めた、たゞ今井の叔父さんは前後不覺の躰である。

僕は戸外へ飛びだした。夜見たよりも一段、蕭條たる海邊であつた。家の周圍は鰯が軒の高さ程につるして一面に乾してある。山の窪などには畑が作つてあつて其外は草ばかりで唯だ處々に松が一本二本突出つてゐる。僕はこんな處に鹿がゐるだらうかと思つた。

大空の色と殘月の光とで今日の天氣がわかる。風の清いことと寒いこと、月の光の遠いことと空の色の高いこと！僕は必然今日は鹿が獲ると思つた。

「徳さん〱今井の叔父さんを起して呉れ」と誰れか家内で呼ぶから僕は歸つて見ると、皆んな出發に取りかゝつて居たが叔父さんばかり高鼾で臥てゐる。僕は、「叔父さん〱」と肩を動搖つたがなか〱起きない。頭の髮を握つてぐい〱引ばつて漸と起した。「此兒はひどい事をする」と言ひ乍ら大嘘をして、

「サア〱！一番鎗の功名を拙者が仕る、進軍だ〱」とわめいて眞先に飛出した。僕も直ぐ其後に續いた。恰も從卒のやうに。

爪先あがりの小徑を斜に、山の尾を横ぎつて登ると、登りつめた處がつ‖の字崎の背の一部になつてゐて左右が海である。それより此小徑が二つに分れて一は崎の背を通して其極端に至り一は山の彼方に下りてな‖の字浦に出る。此三派の路の集つた處に一本の松が立てゐる。一同は此松の下に休息して、な‖の字浦の方から來る筈になつてゐた獵師の一組を待ち合はせてゐた。

朝日が日向灘から昇つてつ‖の字崎の半面は紅霞につゝまれた。茫々たる海の極は遠く大平洋の水と連りて水平線上は雲一つ見えない、又た四國地が波の上に鮮やかに見える。總ての眺望が高遠、壯大で、且つ優美である。

一同は寒氣を防ぐために盛に燒火をして獵師を待てゐると暫くしてな‖の字浦の方の路から逞ましい獵犬が十頭ばかり現はれて其後に引續いて六人の獵師が異樣な衣裝で登つ

て來る、これこそ眞實の山賊らしかつた。
其鐵砲は舊式で粗末なものであるが之れを使用する技術は多年の熟練でなか〳〵巧なものである。別して鹿狩に就てはつ‖の字崎の地理に詳はしく犬を使ふことが上手ゆへ、吾等一同の叔父達と雖も、素人の仲間での黒人ながら、此連中に比べては先生と徒弟との相違がある、されば鹿狩の上の手順など凡て獵師の言ふ處に從はなければならなかつた。

さて愈々獵場に蹈み込むだ。獵場は全く崎の極端に近い山で、雜草荊棘生茂つた山の尾の谷である。僕は始終今井の叔父さんの傍を離れないことにした。

人よりも早く犬は獵場に驅け込むだ。僕は叔父さんと一所に山の背を通つてゐると、忽ち烈しく犬の吠へる聲を聞いた。

「そら出た、そら彼處を見ろ、どうだ鹿だらう、どう〳〵、ウン早い〳〵。」と叔父さんの指す方を見ると、朝日輝く山の端を一匹の鹿が勢よく彼方へ走てゆく、其後を餘程後くれて二匹の犬、吠へ乍ら追つかけて行く。

話に聞いた鹿や死むだ鹿は見たが、現に生た鹿が山を走るのを見たは僕これが始めてだから手を拍つて嬉こんだ。僕の嬉こぶ樣を見て今井の叔父さんはにこ〳〵笑つて御座つた。

「今に見ろ、彼の鹿を打つて見せるから」。

「だつて逃げて了つたから駄目だ」。

「何處へ逃げられるものか、山の彼方の方へ最早獵師が回つてゐるから」、と叔父さんは頗る得意であつた。

さて叔父さん達の持場も定まつて、今井の叔父さんは、今鹿の逃げて行つた方の丘を受持つ事になつたから僕は叔父さんと二人して殆んど足も入れられないやうな草藪の中を擾き分け踏み分け漸の思て程よい處に持場の本陣を据えた。

「今に見ろ、此處に待てゐると鹿が逃げて來るから」と叔父さんは言つた。そこで僕は頻りと彼方の丘や此方の谷を眺めて鹿の來るのを待つて居た。

十五六人の人數と十頭の犬で廣い野山谷々を駈け廻はる鹿を打つとは頗る難かしい事のやうであるが、元が崎であるから山も谷も海にかぎられてゐて鹿とても左まで自由自在に逃げ廻はることは出來ない、又た人里の方へは、全然、高い壁が石で築て有つて畑の荒らされないやうにしてある故、其方へ逃げることも出來ない、更に又た鹿の通ふ路は凡そ獵師に知れてゐるから、たとひ小人數でも犬さへ能く狩り出して呉れゝば、之れを打つに左まで難くはないのである。

そこで今井の叔父さんの持場も鹿の逃げ路に當てゐるので、鹿の來るのを待てゐるの

も決して目的のないのではない。

叔父さんは今に見ろ〳〵と言つて頗る得意の笑を其四角な肥えた淺黒い顔に漲らして鐵砲をかまへて、きよろ〳〵と見廻はして又た折々耳を立て物音を聞て御座つた。折々遠くで吠える犬の聲が聞こへた。折々人の影が彼方の山の背此方の山の尾に現はれては隱れた。日は麗らかに輝き、風はそよ〳〵と吹き、かしこ此處の小藪が怪しげにざわついた。其度ごとに僕は眼を丸くした。叔父さんは銃を持直した。

「オイ德さん」叔父さんは暫時して言つた、「今しがた銃の音がしたやうであッたが、彼の松のある處へ行つて見なさい、多分一ッ位最早獲てゐるかも知れない」。

僕は叔父さんの言つた處へ行つて見た。其處は僕等が今ゐた處から三四丁離れた山の尾の一段高くなつて頂が少し平な處であつた。果して一頭の鹿が松の枝の、僕の手が屆き兼ねる處に釣下げてあつた、そして其處には誰も居なかつた。僕は少年心に少し薄氣味惡く思つたが、松の下に近づいて見ると角のない奴の左まで大きくない鹿で、股に銃丸を受けてゐた。僕は氣の毒に思つた、其柔和な顔つきの未だ生々した處を見て、無殘にも四足を縛られたまゝ松の枝から倒に下つてゐる處を見ると可愛さうでならなかつた。

忽ち小藪を分けてやッて來たのは獵師である。僕を見て

「坊樣、今に馬のやうなのが取れますぞ」。

「未だ取れるだらうか」。

「まだ〳〵今日は千匹は取れますぞ」。

しかし僕は信じなかッた。十匹も取れたら持て歸ることが出來ないと思つた。獵師は岩に腰を掛けて煙草を二三ぷく吸つてゐたが谷の方で呼子の笛が鳴ると直ぐ小藪の中に隱れて何處かに行つて了つた。僕も急いで叔父さんの處へ歸つて來ると、

「どうだ、取れてゐたか、さうだらう、今に見ろ此處で大きな奴を打て見せるから」。

彼是するうち晝時分になッたが鹿らしいものも來ない。忽ち谷を一つ越えた直ぐ彼方の山の尾で銃の音がしたと思ふと白い煙が見えた。叔父さんも僕もキッとなつて其方を見ると、三人の人影が現はれて、其一人が膝を突て續けさまに二發三發四發と打出した。續て犬が烈しく吠へた。

「そら〳〵海を海を、最早しめた、海を見ろ、海を」と叔父さん跳り上がつて叫んだ。成程、一寸と見ると何物とも判然しないが、頻りに海を游ぐ者がある。見てゐるうちに小舟が一艘、磯を離れたと思ふと、舟から一發打ち出す銃音に、游いでゐた者か見えなくなつた。暫時して小舟が磯に還つた。

「今のは太さうな奴だな、フン、甘い〳〵」。叔父さん獨語を言つて上氣嫌である。

「鏃さん、腹が減たか」。

「減つた」。

「辨當をやらかさうか」。

そこで叔父さんは辨當を出して二人、草の上に足を投げだして喰ひはじめた。僕は此時ほど甘く辨當を食つたことは今までに無い。叔父さんは瓢簞を取出して獨酌をはじめた。さも甘さうに舌打して飮んで御座つた。

「これで乃公が一つ打つと一增酒が甘いが。今に見ろ大きな奴を打つて見せるぞ」、瓢簞を振つて見て「その時のに殘して置かうか」。

さて辨當を喰ひ了つて、叔父さんは其處にごろりと橫になつた。此時は恰度午後一時ごろで冬ながら南方溫暖の地方ゆへ、小春日和の日中のやうで、うら〳〵と照る日影は人の心も筋も融けさうに生あたゝかく、山にも枯草雜りの青葉少なからず日の光を映してそよ吹く風にきらめき、海の波穩やかな色は雲なき大空の色と相映じて蒼々茫々、東は際限なく水天互に交はり、北は四國の山々手に取るが如く、更に日向地は右に伸びて其南端を微渺煙浪のうちに抹し去る、僕は少年心にも此の美しい景色を眺めて、恍惚として居たが、何時しか眼瞼が重くなつて來た。傍を見ると叔父さんは酒が順たか銅色の顏を日の方に向けたまゝグゥ〳〵と鼾息をかいてゐた。

此時、小藪を分けて此方に近く者がある、僕はふと其方を向くと、直ぐ其處の小藪の

上に枝のある大きな鹿の角が現はれてゐた。鹿だ！僕はどう爲やうかと思つた。叔父さんを起さうとしたが止めた、起すと叔父さんが必定何だ〳〵と大きな聲を出す、鹿が逃て了う。僕は思はず、叔父さんが小松に立てかけて置た銃をソッと把た。

鹿は少しも人の居るに氣が付かぬかして、小藪の蔭を閑に歩るいて此方に近いて來た。手をのばせば銃端が屆きさうな處に來て立ち止つた。草藪の蔭で其軆は能く見えないが角ばかりを見た處で非常な大鹿らしい。

僕の胸はワク〳〵して來た、何故叔父さんを起さなかつたかと悔むだか最早遲い。十二の少年が銃を把て小馬程の鹿に差し向けた樣は如何に可笑かつたゞらうか。

しかし僕は戰慄ふ手に力を入れて搬機を引いた。ズドンの音と共に僕自身が後ろに倒れた。叔父さんが飛び起きた。

「何だ〳〵危險ない！何したッ？」と掬ふやうにして僕を起した。僕は其儘小藪のなかに飛び込むだ。そして叔父さんも續て飛び込むだ。

「打たな！」と叔父さんは鹿を一目見て叫けんだ。そして何とも形容のしやうの無い妙な笑を眼元に浮べて僕に抱き付いた。そして眼のうちには涙を浮かべてゐた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

此日は獵師が言つた程の大獵では無かつたが併し六頭の鹿を獲て、先づ大獵の方であ

つた。そして僕のうつた鹿が一番大きかつた。今井の叔父さんは歸り路僕を傍から離なさないで、無暗に僕の冒險を褒めた。歸路は二組に分れ一組は船で歸り、一組は陸を徒歩で歸ることにして、僕は叔父さんが離さないので陸を歸つた。

陸の組は叔父さんと僕の外、判事さんなど五人であつた。うの字峠の坂道を來ると、判事さんが、ちよつと立止まつて、溪流の岩の上に止つてゐた小さな眞黑な鳥を打つた。僕が走つて行つて之を拾ふて來て判事さんに渡すと、判事さんは何か小聲で今井の叔父さんに言つたが、叔父さんは眞面目な顏をして「難有う」と言つて今の鳥を受取つた。僕は不思儀に思つたばかりで其時は何の事だか解らなかつた。

其後二月ばかり經つた。其間僕は毎日のやうに今井の叔父さんの家に遊びに行つて、叔父さんの鳥打には必定お伴をした。或日僕の父上が外から歸つて來て、「今井の鐵也さんが鐵砲腹をやつた」と仰しやつて、母上を初め僕も吃驚した。

鐵也さんといふのは今井の叔父さんの獨子で、不幸にも四五年前から氣が狂つて、亂暴は働かないが全くの廢人であつた。其頃鐵也さんは二十一二で、若し滿足の人なら叔父さんのためには將來の希望であつた。しかるに叔父さんも此希望が全く無くなつたが爲めに、殆ど自棄を起して酒も飮めば遊獵にも耽ける、何處となく自分までが狂氣じみた風に爲られた。それで僕の父上を始め皆んな大變に氣の毒に思つてゐられたのである。

處が突然鐵也さんが鐵砲腹をやつて死んで了つた。廢人は廢人であるが矢張獨子に相違ない、これまでに狂氣の快復るといふ藥は何んでも試みて、う‖の字峠の谷で打つた岩烏も畢竟は狂氣の藥であつたさうである。それが今は無殘の最後を遂げて最早叔父さんの望は全く絶えて了つた。

僕は一月ばかり叔父さんの處に行かなかつた。叔父さんの顏を見るのが氣の毒さに。さうすると或日、僕が學校から歸宅つて見ると、今井の叔父さんが來てゐて父上も奧の坐敷で何か話をして御座つた。其夜、父上と母上が大變眞面目な顏をして兄上と何かこそ〵相談をしたやうであつた。

そして僕が今井に養子に貰はれた。叔父さんが僕の父上になつた。僕は其後何度もお伴をして獵に行つたが、岩烏を見つけるとソツと石を拾つて追つて呉れた、義父が見ると氣嫌を惡くするから。

人の善い優い、そして勇氣のある剛膽な、義理の堅い情深い、そして氣の毒な義父が亡くなつてから十三年忌に今年が當る、由て紀念のために少年の時の鹿狩の物語をしました。

（をはり）

福兒傳



ビオルンソン作
蘆花重譯

（一）

彼は名をアイヸンドと稱て、誕生には啼いたが、母の膝に坐ると直ぐ笑つた。それから夕方蠟燭が點と鳴をうたして笑つた、併し其蠟燭に寄れないとまた啼いた。

「變物だよ、此兒は」と母は云つた。

其家の上に裸巖が一つ蹙めて居る、併し左程高い巖でもない、樅や樺が其巖の頭から下を覗いて居て、山櫻の花が屋根に降り撒いた。其屋根にはアイヸンドの所有の小山羊がいつもぶらついて居る、此は亡失ない樣に此處に置いてあるので、アイヸンドは毎も木

葉や草を持つて行ッては山羊を養なつて居た。或日其山羊がピンと飛むで岩を上ッて、それからずん〳〵行つて、此まで行かぬ場所に行つてしまつた。茶が濟むでアイヰンド外に出て見ると山羊が見へない。狐だなとすぐ思つて、眞赤になつて、あたり見廻はして、呼むだ「山羊や山羊や、山羊や小い山羊や」。

「ばあ、あ、あ」と山上から云つて、山羊は頭をかしげて、見下ろして居る。

併し山羊の側には一人の少女が跪いて居た。

「此はお前さんの山羊なの？」

アイヰンドは口も眼も開いたきり、小股引の衣兜に兩手を突込むで立つて居た。

「お前は誰だよ？」

「妾はねマリットよ、母ちやんの孫見で、爺のお鼠で、家の小仙女で、山屋敷のオール、ノオルヂスチユデンの孫女で、此秋初霜夜から二日すると四になるマリットと云ふ者なのよ」。

「さう？」とアイヰンドは長息ついた、少女が言てる間は息もつけなかつたので。

「此はお前さんの山羊なの？」少女はまた尋ねる。

「あゝ」と仰視て云ふ。

「妾ね此山羊が欲くて欲くて仕方がないの。お前さん妾に呉れないの？」

「否よ否だよ」。
少女は横臥むで足蹴りながらアイヸンドを瞰めて居たが、頓て斯云つた「妾がね酪菓子お前さんに上げるから、山羊は呉れないの？」
アイヸンドは貧乏人の仲間で、酪菓子と云ふものは生涯に唯ッた一度食つたばかりだ、其は祖父が尋ねて來た時で、斯様な旨い物は後にも先にも食つたことはなかつた。で、少女を仰いで「其菓子見せなよ」。
二度と請はさず、少女は手に握つて居た大きな菓子を見せて、「此だよ」と云つて、投げた。
「ヤア、崩れつちまつた」アイヸンドは云いながら、一片々々丁寧に拾ッた。如何にもたまらないので最小い破片を味つて見たが、あまり旨いのでまた一箇食つて、ついうか〳〵すッかり菓子を食つてしまつた。
「もう山羊は妾のだよ」と少女は云つた。
アイヸンドは最後の一片を頬張つたまゝはつと思つて止めた。少女は横になつて笑つて居る。胸の白い毛の薄黒い山羊は少女の側に立つて横目に見下ろして居る。
「少し待てゝ呉れないの？」とアイヸンドは乞ふた、動悸がうち出した。すると少女は稍々笑つて、膝突いて起き上つた。
「否よ、否、山羊は妾のだわ」立つて少女は山羊の頸に抱きついた、それから襷の紐を解いて

頸細にした。アイヰンドは立つて見て居る。少女は起ち上つて、山羊を曳きずりかける。山羊は行かないで、アイヰンドの方に頸さし伸べて「ばあ、あ、あ」と云つた。併し少女は片手に山羊の毛を握り、片手で紐を曳いて、可愛らしく「山羊や御出よ、お前宅に入ッてね、母ちやんの奇麗なお皿や、妾の前掛で御馳走食べるのだよ」と云つて、それからまた斯様な歌を歌つた。

山羊よ來い〳〵、爺に來い。
犢よ來い〳〵、牛舍から來い。
猫よ來い〳〵、雪白の靴穿いて。
家鴨の子來い〳〵、黃い家鴨の子。
雛鷄來い〳〵、小ちやい雛子。
柔らつこい小ちやい
走れぬ雛子よ。
鳩よ來い〳〵、可愛鳩よ、
立派な羽もつて來いよ來い〳〵。
草堤の朝露露滋けれど。
日輪樣が暖めしやう。

夏はまだまだ早けれど、
　秋を呼んせ、急いで來ましよ。

アイヰンドは獨り殘されてしまつた、其山羊は冬の頃生れた以來終始自分の遊び仲間で、此が亡くならふとは思はなかつたに、今は瞬時に何もかも濟むでしまッて、最早二度と其山羊を見ることは出來ない。

母が磨いて居た器を持つて水側から歌ひ〳〵上つて來ると、アイヰンドが草中に坐つて泣いて居るので、側に寄つて「何を泣くだアよ？」

「ウヽ山羊が、山羊が！」

「山羊は何處に居るだ？」と云ッて母は屋根を眺めた。

「山羊は到底戻つて來ないのだもの」とアイヰンドは云ふ。

「何山羊は如何したのだよ？」

アイヰンド容易に白狀しない。

「狐に奪られたのかい？」

「狐なら好えけんど！」

「氣が違アしねへかよ。山羊は如來なつただ？」

「お、お、お、——損しちやつた——酪菓子で賣つちやつたんだもの」。

と云ふ口の下からアイヸンドは酪菓子一つで山羊を賣るとはひどいとしみ／＼感じた、前には些も其考がつかなかつたのである。

母は云つた「酪菓子一つで賣つてしまうなンテ、彼小山羊が如何に思ふか知れねへじやねへかよ？」

アイヸンド自身も其様思ッて、此世では到底二度と樂く暮らす事は出來まいと思つた、在天の神様に對しても、とまた後に思ッた。斯心が折れたので、最早今後は決して悪い事は仕まい、紡輪竿の糸を切るまい、母羊を羊欄から出したりしまい、獨りで湖水の端には行くまい、と心に誓つた。それからアイヸンドは横になッたまゝ睡つて、山羊が天に行つた夢を見た。天には主が恰信仰問答に書てある樣に長い髯を下げて坐つて御出なさる、山羊はぴか／＼光る木葉を食つて居る、併しアイヸンドは獨り屋根に坐つて、山羊の所へは上れない。

恰其時何か濕つぽいものがアイヸンドの耳に突き込むだので、彼は愕と刎ね起きた。「ばあ、あ、あ」と云ふ聲がする、山羊が歸つて來たのだ。

「そや、歸つて來たの！歸つて來たの！」

アイヸンドは飛び起つて、山羊の前足二本引とらへ、兄弟の樣に山羊と躍つた。彼は山羊の髯を引張つて已に母へ連れ行かふとする時、後に物音がして、見ると件の少女が自

分のすぐ側に來て草に坐つて居た。此で何も解つた、アイヰンドは山羊を手離した。

「山羊を連れて來たのはお前なの？」

少女は草を捋りながら「山羊を置いといちやアいけないッて云はれたの、祖父さんが彼處に坐つて待てるわ」。

アイヰンドが立つて少女を見て居ると、忽ち道の方から鋭い聲で「如何した」と呼ぶのを聞いた。

處で、少女も吩附を思い出したと見へ、起ち上つてアイヰンドの側に寄り、泥だらけの片手をアイヰンドの手中に置いて「御免よ」と云ッた。

云ッてしまふと、覺悟もゆるむだと見へ、少女は山羊に兩手を投げかけて、泣いた。

「山羊はお前さん持つてるが好いや」とアイヰンドは側向きながら云ふ。

「早くしないかよ」と祖父が崖の上から呼むだので、マリットは立ち上り、足曳きずッて祖父の後から上つた。

「お前さん韈の紐を忘れたよ」とアイヰンドは跡から呼びかけた。少女は振りかへッて、紐を見、アイヰンドを見て居たが、遂に大奮發して濁聲で「それはお前さん持てゝ宜いの」。

アイヰンドは少女の側に寄つて、手を取ッて、「有り難ふよ」と云つた。

「禮なんぞ云はなくても宜いわ」と答へて、ひどく溜息をついて行つてしまッた。

アイヸンドは再び山羊を側に引つけて草の上に坐つたが、如何したものか前程山羊に氣はなかッた。

（二）

山羊は家の壁側に繋がれた、併しアイヸンドは山の方ばかり仰視いで居る。母が出て來て、アイヸンドの側に坐つた。アイヸンドは最早山羊では物足らぬ、遠方の話が聞き度くなつた。で彼は此樣な話を聞かされた、昔し昔何如な物でも言つた時節があつて、山は小川に、小川は川に、川は海に、海は空に話をしたと云ふ事だ。それから空は何かと話はせぬかと聞いたら、果して空は雲と、雲は木と、木は草と、草は蠅と、蠅は獸類と、獸類は小兒と小兒は大人と、それからそれとぐる〱廻りに話して、果ては誰から話を始めたやら一切分からなくなつた。アイヸンドは山や、木や、湖や、空を眺めて、目新しく思つた。恰其時猫が出て來て、日向の敷石に寐ころむだ。

「猫は何て云ふの？」とアイヸンドは指して問ふと、

母は斯歌つた。

　夕日は空に沈みけり。

猫は寐ころび眼をしばたゝき、

「小鼠を二疋と、

酪のうまいのと、
魚を四尾、
皿から盗むだ。
欲しい程喰つて、
草臥れてしまふた』。
と猫が云ふ。

それから雄鶏が牝鶏一同引連れて來た。アイヰンド手を拍いて、「雄鶏は何て云ふの？」と尋ねた。

母は斯歌つた。

母鶏や羽翼を垂れにけり。
雄鶏や片脚で立ちながら
『鼠色した鵝公めが、
舞ふたりうろ〳〵ついたとて
はあ、はあ、到底乃公が
半分の智慧もありやしねへ！
入れ、入れ、牝鶏、側へ寄れ！

今日は日輪さまの休息日だ』
と雄鷄が云ふ。
それから小鳥が二羽屋根の脊梁にとまッて歌つた。
アイヰンドは笑いながら「鳥は何て云ふの？」
『世の中は面白や、
骨折苦せぬ者にァ』
と鳥が云ふ。
斯様に母はあらゆる動物の言ふ事を數へ立てた、苔に這ふ蟻、木皮に鳴く蟲までも。
其夏母は始めてアイヰンドに讀法を教へた。アイヰンドは長い魔書を貰つて、此が言ひ出したら如何だらうと餘程考へた。果して文字が獸になり、鳥になり、あらゆる物になつた。其内文字は二つづゝ並むで來て、aが立つてbと云ふ木の下に休むで居ると、頓てcが來て其様する、併し三つ四つ一處になると何だか喧嘩でもする様で、一向仲好く行かない。習ふ程、いよいよ忘れる。aの字は大好きで、一番長く覺えて居た。此は小さな黒羔で、何とも仲好だ。併し其aすら程なく忘れてしまッた、書物は最早神仙譚ではなく、稽古ばかり書いてある。
或日母が來て斯云つた「明日學校が始まるだ、和子母と學校へ行くだァよ」。

學校と云ふは大勢の子供が打寄つて遊ぶ處だと聞いて居たので、アイヸンドは些も異議を出さなかつた。處が、中々大慶であつた。是まで學校にも度々行つたが、併し稽古中には行つたことがなかつた。で、アイヸンドは逸りに逸つて、母よりも急ぎ足に丘を上つた。偖學校の玄關に入ると、宅の水車小屋の様な騒ぎが聞へる。何と母に尋ねると、「小供が讀書むでるだ」と答へた。アイヸンドは喜むだ、自分がまだ文字知らぬ頃讀むで居たのも矢張此通りであつた。内に入つて見ると、寺でも此れには越さないと云ふ程大勢の子供がテーブルの周圍に坐つて居る。また壁に引沿ふて午餐箱に腰かけて居るのもあれば、黒板の周圍に群がつて居るのもある。白髪翁の先生は爐側の腰掛に踞つて、烟管を詰めて居る。アイヸンド母子が入ると、皆顔を上げて、水車小屋は水を堰いた様にはつたり止まつた。皆新來客を見て居る。アイヸンドの母は先生に辭儀する先生も答禮する。

「書を習ひたいてんで此兒を連れて來ましただ」と母が云つた。

先生は革袋の烟草を摸索りながら「此兒の名は何と云ふんだね？」

アイヸンドてんですよ。名字だけは知つてドウなり綴れますだア」。

「フーン、さう！」と先生云つた「白頭兒、此處へ來なさい」。

アイヸンド先生の側に行くと、先生の膝にかきのせて、無緣帽を脱た。

「でも奇麗な子だの」と先生云つて、髪を撫でた。アイヸンドは先生の眼を見上げて、笑つた。

「乃公を笑ふのかい」と云つて先生は顰めた。

「あゝ、其様だとも」とアイヸンドは答へて、大笑ひに笑つた。すると先生も笑い、母も笑い、それから子供も笑つても差支はあるまいと思つて皆どつと笑つた。

此がアイヸンド入校の次第である。

偖アイヸンドが席に就くとなると、皆席を讓らふとする、併しアイヸンドは先よく／＼見廻した。皆囁やいて、指さして居る、彼は帽を手に、書を小脇に、八方見まわした。

「如何だね、決定たかの？」先生まだ烟管をあつかひながら問ふた。アイヸンド先生の方に向くとたんに、直ぐ吾側の爐石の側に、名澤山のマリツトが小さな赤箱に坐つて居るのを認めた。マリツトは兩手で顏を隱して、彼を覗いて居る。

「乃公あ此處に坐るだ」とアイヸンドは決然と云ひ放つて、箱を取つて少女の側に坐つた。するとアイヸンドに接して居る方の腕を少し擧げて肱の下から覗いた、アイヸンドも直ぐ兩手で顏を掩て肱の下から覗いた。二人で此樣な痴かな事をして居ると、頓て少女は笑ひ出した、アイヸンドも笑つた、子供一同其れと見て笑つた。所で恐ろしい大音が鳴り出したが併し其聲は次第に和やかになつた。

「靜かにしないかよ、此處な小猴子共！靜かに温良しろよ、人形共」。
此は先生で、先生は毎も怒鳴り出すが、併し直ぐ靜まるが癖である。學校は忽ち靜かになつて、例の胡椒水車がまた廻り出し、皆それ〳〵高聲に書を讀み出す。高音が高調子に誦出すと、低音は之に勝たふとしていよ〳〵鋭くなつて、おり〳〵誰かゞ大聲に喚き出す。生れて以來アイヴンドは此樣面白い事はなかつた。
「此處ぢや何時でも此樣なの？」とアイヴンド、マリツトに囁くと、
「あゝ、恰此樣よ」と答へた。
それから頓て二人は先生の側に行つて讀まされる、それから子供一人つけて一所に稽古させられる、其が濟むと二人は免されて元へ戻つて靜かに坐つた。
「妾もね、今山羊を有つてるわ」とマリツトは云つた。
「有つてるの？」
「あゝ。でもね、お前さんの程立派ぢやないわ。」
「何故其後岩の上にァ出て來ないの？」
「祖父さんがね落こつちやァいけないつて」。
「でも岩は其樣高かァねへや」。
「だつて祖父さんが聽かないわ」。

「母はね其は種々な歌を知つてるよ」とアイヷンドが云つた。
「祖父さんも知つて居るわ、本當に」。
「左樣、其れでも母の知つてる歌は知らねへや」。
「祖父さんはね舞踏の歌を知つてゝよ。云つてあげやうか」。
「あゝ。何卒」。
「其れなら先生に聞へない樣にもつと此方に御出な」。
アイヷンドは側へ寄つた。少女は一寸した歌を四五度も繰り返へしたので、アイヷンドもよく覺へた、此がアイヷンドの學校で始めて習つたものであつた。

『踊れ』と叫ぶ提琴の音や、
軋りに軋る糸の音に、
踊り起つたる捕吏の子が
『ホオ！』とこそは叫びけれ。
『止まれ！』と呼びしはオラアどの
ひよいと足をば差出せば、
ばたりと捕吏が子は倒れ、
娘等どつと笑ひけり。

『ソラ飛ぶぞ』と囁くエリックさん、
ひらりと棟梁に飛びのれば、
材木ァ軋々
壁は瓦多〳〵。
『止めろ！』と呼むだるエリングどの、
襟頸無手と引つかみ、
高く擎げて＝『貴様ァ
弱い奴、猫見た樣』。

『ヘエ！』と呼むだるラスモスどの、
娘のランチを引捉へ
ぐるりと廻して『さあ早く
接吻をしないか、しないかよ』。
『否よ！』と答へて、ランチは
鬢側ぴつしやり打たゝき

するりと腕をすりぬけて

『御苦勞貫には此れ上げる！』

「さあ子供共立つた」と先生叫むだ「今日は初日だから早く歸るだ、が先づ祈禱と唱歌だ」。忽ち校中大騷ぎに騷ぎ出し、長い腰掛に飛び上り、室内を走り廻り、皆一齊に喋舌り出した。

「靜かにしろよ、此處な小猴奴の、小惡黨奴の、惡小僧奴、靜かに行儀よく室内を歩るかないかよ、好しかよそれで良い兒だ！」と先生が云ふと、皆穩く己が塲所について、靜まつたので、先生は其前に立つて短かい祈をした。それから歌だ、先生が強い乙音で首唱めると、小供は皆合掌して立ちながら一處に歌つた。アイヸンドはマリツトと最下の戸の側に立つて眺めて居た、二人も矢張り合掌して居たが、歌へなかつた。

アイヸンドが入校の第一日は斯通であつた。

(三) の上

アイヸンド次第に成長して活潑な男兒になつた。學校では一番出來る内だし、宅に居ては仕事に精出す。其も畢竟宅では母を愛し、學校では先生を愛するからである。父は漁に行つたり、水車――村の一半は此水車で舂かせた――の見張をしたりするので、アイヸンドも父に會ふのは稀であつた。

此年來尤もアイヸンドの心を動かしたのは、或夕爐の側で母から聞いた先生の履歴である、彼の書には此話が始終貫いて、先生の言には語々此話が伏れて、靜な時は校堂の空氣も此話が籠つて居る樣に覺へる。此話の蔭でアイヸンドは從順恭敬になり、此話の蔭ですべて習ふ事を能く解する樣であつた。其話と云ふは左の通だ。

先生の名はペアルドと云つて、アンドルスと云ふ兄弟があつた。二人到て仲よく、二人共に兵籍に入つて、共に市に住むで、共に伍長になつて、同じ隊に勤めて、一處に軍にも出た。軍が濟むで、歸ると、誰も皆揃ひも揃つた倔强な男だと云つて居た。其後父が死むで、其遺産の中に平等に分たれない雜物が大分あつたので、二人は斯談合した、决して爭ふまい、此樣な物は皆競賣に附すとしやう、すると好きな物は勝手に買ふし、競賣の上り高は二人で分けられると。偖いよ〱云つたる通り斷行したが、こゝに父の所有に大きな金時計があつた、此あたりの者は此外に金時計と云ふものは見たこともないので、中々評判高いものであつた。此金時計が競賣に出ると、富裕な輩で口をかけたものも多かつたが、ペアルド兄弟が値をつけ出すと、他の者は皆避いた。然るにペアルドはアンドルスが時計は自分に呉れそうなものと期望つて居るし、アンドルスはまたペアルドが其樣するであらふと思つて居たので、互に試むる積りで値をつけ、値をつけながら互に間隔てゝ顏見合はした。時計が二十弗に上ると、ペアルドは。弟が己に競ふはよ

くないと思つて、段々せり上げて三十弗近くなつた。左れどもアンドルスは已めないので。パアルドは思つた、アンドルスは自分の恩を忘れたな、乃公が兄だと云ふ事も忘れたのだなと。時計は三十弗を越た、アンドルスはまだ已めない。其處でパアルドは一擧に時計を四十弗までせり上げて、最早弟の顔は見なかつた。競賣室は靜かになつて、唯役人が靜かに値段の數字を反復すのみである。アンドルスは其處に立ちながら、パアルドが四十弗出せるなら自分だつて出せる、パアルドが時計を惜むなら自分だつて取らずには置かぬ、と斯思つたので、一際高く値をつけた。此がパアルドには未曾有輕蔑と思はれた、で物靜かに五十弗と値をつけた。周圍には大勢の人が立て居る、アンドルスは斯樣に人間の多い所で兄に耻かゝされてはならぬと思つたので、またせり上げた。所でパアルドは笑つて「百弗だ、百弗だ、おまけに兄弟分もつけてやる」と云つて、身を轉して室外に出てしまつた。彼はつい前に買つた馬にさつさと鞍置いて居ると、頓て誰やら出て來て「時計ァお前さんのだ、アンドルスが負けた」。

それと聞くよりパアルドは忽ち悔て、思ふは唯弟の事、時計ではなかつた。鞍は已に置いてあるが、行かうか行くまいかと迷つて、馬背に手をかけたまゝ立止まつた。すると大勢の者が出て來る、アンドルスも出て來た。兄が鞍置いた馬の側に立つて居るのを見ると、何思つて居るとも知らず、斯呼はつた「パアルド、時計の御利益があれば好のゥ！

乃公アがお前のあと追つたりする時や時計も動きはすめへよ」。
「乃公が歸つて來る時もよ」とパアルドは眞白な顏して馬に乘つた。其後二人とも昔し父と住むで居た家にはまたと入らなかつた。
程なくアンドルスは妻を迎へて、木小屋の借人になつたが、パアルドは婚姻に招なかつた。パアルドも寺には行かなかつた。
アンドルスが結婚した其年、唯一の牝牛が家の北壁の側で繋がれたまゝ死んで居た、如何して死んだのか誰も分からない。それから種々な災難が續いて、次第に零落れた。併災難の極であつたのは、仲冬に納屋が燒けて、入つて居たものも一切燒けてしまつた、火因は誰も知らない。
「誰か乃公を惡むでる奴が所爲だ」とアンドルス云つて、其夜は泣いた。貧乏になつて、働く勇氣もなくなつた。
翌夕、パアルド突然アンドルスの室に入つて來た。其時、アンドルスは床に臥て居たが、刎ね起きて「何の要だい？」と尋ねた切りで、ちつと兄を睨むで立つて居た。パアルドは稍隙つて斯答へた。アンドルス、乃公アお前の加勢してへだ、お前も仕合が惡かつたのウ」。
パアルド、乃公か仕合アお前の願望通りになつただ。行つて貰はうよ、行かなきや此手が支られ〆かも知れねエ」。

アンドルス、「お前其ア思ひ違へだ。乃公あ本當に氣の毒で――」

パアルド、「行かつしやい、行かなきやお前と乃公の身の上だア」。

パアルドは一二歩退いた。凄い聲で「時計が欲なら、お前に遣る」。

「パアルド、行け！」とアンドルス叫むだ、パアルドは出て行つた。

(未完)



小兒十五才迄ノ內諸病
一代根切請合治す

日本一
法小兒
藥王

肝涼圓

◎此肝涼圓は小兒當歳より十五才迄の內むし一切萬病重きは年の數二三度用ひ立處に治する事妙なり又いかほどむづかしき病にても年の數一日に一度づゝ一と廻り七日用ひれば極て本復する事奇妙を得る御藥なり
○大人○癲癇男女の勞咳痟積氣積痰積疝積の症重きは年の數輕きは壹服用ひて即功ある事奇々妙々なり

藥價 十粒入金三錢十七粒入金五錢三十四粒入金十錢
大包百粒入金貳拾五錢仝二百十粒入金五十錢

京都富小路通竹屋町東西角
本家製劑所 堀 勝 藏

東京日本橋區本町四丁目
關東支店 森田彦四郎

○のぼせめ○かすみめ○

玉靈膏

○ちめ○はれめ○たゞれめ○眼病一切の靈藥にして有効確實なる滿天下に普及し世人の知悉せらるゝ處眼病患者必ず試用せられよ不思議の功能を顯す
○夜業する人○執筆する人○讀書する人等常に眼を多分に勞用する人は寢る前に用ひ置べし○用法悉敷は本劑能書に詳記しあり

藥價 小金五錢●中金十錢●大金卅錢

東京日本橋區本町四丁目
本舖 森田彦四郎

●取次は各地到る處の藥種賣藥舖にあり
御最寄にて御求めの上御試用あれ



アー芳い香〱と互に見返る床しき薫に格別

詰め替るゝ(にほひ袋)金鵄麝香は特に有効一等賞を賜りしも道理 麝香も雲南の正眞を用ひ其加之外の薫料も極々撰んで 芳香の永く保つ事を發明し 形も金鵄勳章に摸して眞に高尚優美なからである

今般に 本年發明せし人造琥珀に金鵄を彫刻したる新意匠は特別高尚なり名譽にも今回 宮内省の御用を蒙るに至る價は卅五錢と特別一等品七十錢 ◎ 紋織地製は卅五錢、廿錢、十錢 別製上等五十錢

きんしやかう
金鵄麝香 本舗 大阪平野町西詰南入 森下南陽堂

一手販賣 東京市日本橋區上槇町 安川晃榮堂

陸軍衛生部實驗胃病の良劑

清涼健胃散

効能

胃弱、溜飲、過食、宿酔、胃痛、嘔吐、船酔、悪心、食傷、腹脹、下食、食物不消化等凡て胃弱より起る病によし又産前産後に大功あり

此清涼健胃散は本舗の家傳藥にして余が陸軍衛生部に出身中幾多軍人中の胃病患者に就て實驗したる良劑なれば弘く世の難治者を救はんとするも賣藥規則により賣藥禁ぜられしを以て病者の求めに應ずる能はず不得止官許を得て賣藥とせり然れども普通の賣藥と異なり敢て私慾に走らず世の胃病に苦しむ人を救濟し且つ衛生の一助たらん微意に外ならずさ ふ他藥と同視するなく余が言を信じ一回たり服用し其効能の如何を試み玉はんことを◎重症さ雖も一二劑服用せば必ず疾苦を忘れ爽快を得る如神◎記憶せよ本舗は藥店賣藥店にあらず◎藥價七日分廿錢 四日分卅五錢送料各二錢爲替は芝口支局郵券代用一割增願升

調劑本舗 東京市芝區田村町十番地 谷口大文字屋

御注文の節は家庭雜誌廣告御覧之旨御記載有之候方へは送料當店にて自辨可仕候

（明治廿五年十月十四日遞信省認可）（明治卅[illegible]年八月[illegible]日發兌）東京市京橋區[illegible]町廿六七番地株式會社[illegible]

電話 本局千四百四十六番



電話 本局千四百四十六番

復刻版 家庭雑誌 第2回配本（第6～11巻・別冊1）

1987年1月10日 発行

定価 108,000円

発行者 船橋 治

発行所 不二出版(株)

東京都文京区本郷5-28-3

〒113 ☎03(812)4433

印刷所 ワールド印刷

製本所 吉田製本工房

乱丁・落丁はお取り替えいたします